千家元麿詩集

夏卿

平凡社

夏草・詩集・千家元麿

¥2·80

千首九歌
詩集
屬首
西鶴自筆

夏艸 詩集

千家元麿著

千家九體
詩集

石湖草

丙寅夏日
[illegible]

夏草

千家元麿

詩集の序

自分の歌つた詩が少しでも讀者に益するところがあつたら自分は喜ぶ。自分の内に燃える火がかゝした之等の詩は他人にとつても亦無關心のものでは無いと思ふ。自分と同じ考へをもち、又自分の詩と同化して喜んでくれる人もすくなくはないと思ふ。自分はこれらの人々に一人でも多く讀んで貰ひたいと思つてゐる。自分の詩は教養のない詩かもしれない。詩の價値が單に文學的教養の豐富さから賞讃されるなら、自分の詩は零に均しいかもしれない。しかし自分の詩にはそれらの缺けたものを償ふ火があると思ふ。精神に缺けてはゐないと思ふ。

「夏草」と云ふ題は、自分の愛する夏の匂ひを高くしたかつたから擇んだ。この詩集を編むのに又出版に就て米良重穂兄の多大な勞力をわずらはした事を感謝する。又畏敬する岸

2 田兄に裝幀をして頂いたことに歡喜してゐる。

大正十五年七月十日

千家元麿

桃

桃が咲くと
春は漸く來たやうだ
陽の光り
近く
神近くに在すがごとく

桃と鶯

春の曙
人々は未だ眠つてゐる
目を覺したのは花と鳥ばかりである
園生の中でも一番早く咲いたのは桃の花
それであんなに紅いのだ
誰よりも早く御日樣の光にふれたので
鳥の中では鶯だ
春の來たのを告げる青い小鳥の鶯だ
朝の一番澄んだ空氣を吸つたので
あんなに聲が清いのだ

梅

いゝ日和になつた
歩くのが樂しい
通り抜けた路次の
日當りのいゝ塀の上に
眞盛りの梅が白かつた

土筆

春の遊びになくてはならない
土筆

雪

雪が降つたが
大地は伸々してゐる

春の曙

春の曙の女神が
早起きの人間を見て驚く

雲雀籠

草原に雲雀籠を置いて
雲雀を鳴き合はせてゐる
老いたる友達の親しさ

河

河は遊んでゐるやうに流れてゐる春

桃

子供が學校のかへりに桃を折つて來た
嬉しさうに

冬の夜道

冬の夜道に木の影が倒れてゐた
月夜だなと初めて氣がついて
ふりかへつた屋根の上に月があり
もう春も近いと思つた

春の黎明を歌ふ

黎明よ、光と美と力の汝の前に

神聖のをの〻きを感じ
惰眠から目ざめて
成りゆく春の曙の前に
卑しき情はかけをひそめ
朝は淨めの力と喜びの焔で
世界を洗ふ
お〻春の曙のめぐましき美よ
神も眠りから奮ひ起ちたまふ
汝は宇宙に無比
東端の海洋から黄金の第一の神聖の矢は
山嶺の岩壁心幅ひろく射られ
金無垢の大なる智略に優れ

大膽無比の美と力の奔放な若者は
今しもその隆々とした麗らかな臂を張つて
引き絞つた大なる弓を放つ
ブルデルのヘラクレスのやうに
お〻目覺しいゆらぐ黄金の朝よ
眩ゆき天使の神聖な翅のゆらぎ立つ時
かゝる時地の諸々の大洋、山岳、原野は
麗らかな朝日に笑ましく哄笑して
森は原始の眼覺めに露うちはらひ
芬々たる千草の花は原野谿谷に優しい明眸を開いて
その艶な唇に笑ましき喜びを浮べる
お〻朝の野の喜びよ、露に蔽はれたる草むらや

一

木々の枝に春は綻びて、紅き唇頭を開き
清らかな河のほとりの繁みには
清き鶯の樂しく囀るのを聽く
鶯は清い朝の目ざめの歌で
彼女はその美音で眠れる花を開かしめ
人の心に清きよろこびを生む
をゝ春の曙よ、桃、さくら、菜の花
たんぽゝ、桃の類も我れ一番と朝に魁け
露も乾ぬ森蔭と草むらより雲雀は歡喜の歌を空に告げ
宇宙に無比のこの春の曙を
自分は樂しく期待して
どんな歡樂と光が
今日の眞晝に與へられるか
曙はこれから成りゆく盛んな春の饗宴の除幕式で
準備はすでに野に山に森蔭に出來て
今は天帝の君臨を待つばかりである

早春の散歩

夜そとを歩いてゐてももう寒くない
生温い空氣が快く顔に觸れる
道はほの白く朧ろに續いて
そこらの建物が温い朧ろめく夜の闇に包まれて

その上に星屑が明滅してゐる
星明りの空に道端の庭木が突き出して
もう蕾をもつらしい灰色の枝が
參差として縺れたその間に
微妙な空の明りが漂つて
さ霧が靜かに降つてゐる
自分は恍惚として靜かな早春の郊外の夜道を歩いてゆく
現實の世界は遙か彼方に去つて
自分の眼前には只永遠の安息と
平和な星座と地を籠める温い夜霧と
無數の愛する家々と樹木が
幻燈のやうに淡い燈影に刻まれて浮んでゐるのに靈智を慧く鋭くされ

肉軀からは不思議な感覺が
今闇の中で醱酵したやうに
大空へ温い大氣の中へ擴り溶けてゆくやうな
觸感に鋭くされる
私は自分の生きてゐる事を感じる
柔しい草や蕾の萠芽が出さうなこんな晩
私は書籍や客間や日々の單調な實務的な
生活から少しでものがれ
朧夜の中を歩み、早春の匂を嗅ぎ
幽瞑隔てる星の大空の方へ恍惚として想ひを馳らせ乍ら
私は生きてゐる、大きく生きて居る事を感じる

雨

びしよ濡れになつて
大きな樹の蔭に入つて
見ると、その樹は幹も根も少しも濡れてゐない
たゞやつと頭を濡らしてゐるばかり
この雄大な樹木にとつては
何と云ふ些少な雨だらう
しかし樹木は靜かに美しく立つてゐた
廣大な樹木
佛陀のやうな樹木だ

見上げると高い葉に
雨の音が天上で靜かにきこえた
雨はやがてこの樹をも濡らし初めた
雫は垂れ、幹も根も濡れ
美しい天の水の中に佛陀のやうに
廣大の樹木は嚴かに浴み初めた

河

のろ〳〵と
土色の水が

音もなく靜かに
大軍のやうに
野から街へ入つた
美しい花咲く野を流れてゐる時の
あの幼さない淸さも失つて
今は濁つて旅に疲れてゐる
他國へ入つた兵のやうに

太陽神よ

太陽神よ

早や近く地球の側に
來ませしか
花は咲き
御身を迎ふ
我らが喜びを
傳へんとて雲雀は
御身に近く歌ひ騰る
太陽神よ
近づき給へ
御身の傍にありて
皆、喜び、皆、暖り
樂しと思へば

花は亢奮して咲き
鳥は擧つて歌ひ
我等も擧つて祝がん
を丶希臘めく春よ、太陽神は我らの地球に近づけり

春は來る

春は來る
愛らしの春よ
少女ら美しく
羞らひ歩めり
彼女らの身ごもるも近きにあらん
愛らしき天使のごとき嬰兒を抱きて
歩むを見るも近き日ならん

桃よ

桃よ
東洋の花よ
爽やかな眞紅の鮮やかな
三月の曙の花よ
微笑ましい花よ

梅

この一本の梅の生氣
百も万もの花が青空の下に馨る

青空

青空の下に生きるなり

春の曙

眠りから
神覺め給ふ
春の曙

梅

大地と共に
神の眠りや梅白し

梅

梅は白く精神の花

桃

雨の中に桃が蕾んでゐる

朝

床をあけてきれいになつた部屋に
窓から差し込む日の光りを感謝して
座る時の樂しさ
毎朝だが、毎朝うれしい

鶯

どこかで鶯が啼いてゐる

實に清らかな朝らしい聲だ

鶯

清らかな處を好む鶯でなくて
あの美しいこえは出ない

春の曙

人間がもう起きてゐる

春の曙
春の曙の女神が
人間を見て驚く

河

大きな河があるかと思ふと
小さい河がある

曙

春の曙は宇宙無比、他に比べものもない

梅

これが人の世か
靜かに梅が咲いてゐる

梅

白梅に
空が清く澄んでゐる

春

春が來た
河は樂しさうに
水は清らかに陽をうつして流れる

自分の想像も清くなる

春

春は仙術者
幻の花が咲く

春

駘蕩たりわが家のめぐりの春も

土筆

土筆摘む化物屋敷の庭に入り

花

花を愛すのは樂しい事だ
神々は愛を與へ給ひ
又美しきものをつくりて
愛させて

人々御身の近くに召し置かれん心なるべし

花

花を愛すは聖(ひじり)なり

櫻

齡古びて
もろき枝とはなれど

尙幼き花の咲く櫻の貴く思ゆ

櫻

その昔位高く貴き人の住み給ひし趾か
古びし櫻のすごきほど美し
只ならぬ庵と櫻の殘りて
朧めける草の生ふるあり

薔薇

薔薇よ、青葉の庭の薔薇の一群よ
側へ寄ると香氣が襲ひかゝり
手をのべて折りとらうとすると
花辨と露がハラ〳〵と滑れる
丈高い薔薇の株よ
いつも露が乾かず匂ひに濡れてゐる薔薇よ
私は御前の側へ寄らずにはゐられない
神秘なふくらんだ大きな花の微笑よ
微笑するバラの花よ、聖なる正義のしゐしの薔薇よ

母の聲

女の聲の美しさ
どこかで聞える
春らしい幸福の聲
朗らかに響く笑ひ

桃

桃よ

三月の桃よ
東洋の花よ
燈をつけたやうに
麥の青む畠の中に
明るく亢奮してゐる眞盛りの桃よ

堇

堇よ
長閉な顔して
おまへは咲いてゐるね

浮世離れて
枯草の中に
優しい堇よ
外のものが未だ眠つてゐるのに
もうおまへばかりは目を覺ましたの
本當に待ち遠しい春だね
でもおまへを見て
今日は氣が晴々した
堇よ、有難う
春はもうぢきなんだね
今に皆んなも目を覺すだらう
たんぽぽや蓮華たちも

友達の菫よ
獨りで居るのも一寸の間だ
春はもうぢきやつて來る

秋

櫻の葉がもう落ち初めた
一番早く秋を感じるのはおまへだ
やさしい櫻よ
道を歩いてゐて
おまへの黄ろい葉を見て

私もおまへのやうにさつぱり
不淨なものを振るひ落して
澄みわたる秋に調和したく思つた

春

春よ
明るい春よ
燃ゆる空氣に
木々に花つけ
王様の庭のやうに

どこもかしこも典雅に美しい
こんな美しい土地をもつ
王様に榮へあれ
民は樂しく、勵み
畠は廣く、苦るしむものなく
平和の笑ひ滿つる世界
そんな世界よ、早く來い

友よ

友よ

今年ら亦君と
春の郊外散歩が出來るのを喜ぶ
そろ〳〵亢奮病が起ります
燃える林や草叢へ踊り込んで
木の花や草の花に亢奮する時が來た
亢奮するのを笑ふ人は笑へです
春は亢奮しますよ
木の花の亢奮してゐるのを御覽なさい
しかし僕達は野卑な亢奮は喜ばない
典雅の春ですもの
ギリシャ式に亢奮するのです（呵々）

花

オヽ、花よ花よ
亢奮する花よ
燃ゆる枝々の上で陽に近く
花は亢奮して居る

春が來た

春が來た　三月が來た

あヽ、先には樂しい月がとつさり待つてゐる
四月、五月、六月、七月、八月
未だ〳〵どんなに樂しい幸福な季節がつゞくだらう
花は秋まで咲き絶えず
空は美しく、日の光は麗らかに
地は愛するものに充ち
神々しいパラダイスが出來上る
恍惚の月々は
皆んな艶な、亢奮した綠のすが〳〵しい花と
美しいカレンダーをもつてくる
あヽ想像しても喜ばしい
愛する月々がこれからめぐつて來るのだ

五月、六月、七月、八月……
麥が伸び、日の光りに透き徹り
蛙が啼き、藤の花が垂れ下り
青葉が世界を埋め、深邃な夢は深くなる
燕も遙々菖蒲が咲く輕快な田圃の國へ來るだらう

何の花か

何の花か
白き濃やかな花つけて
野に立てるは

すがくしい裝ひの
綠の中に立てる

野の少女

野の少女はよし
粗末な衣つけて
脛出したれど、眼は黑く
顏赤く健やかに笑ましく
我を見て敏捷に籔の中へ馳け逃れ行けり

春の夜

春の夜の汽車の内
都の春見に來りし客混みて騷々し
話の種の多くて彼等は
野卑に笑ひ興じ合へり
やがて疲れて人々はやゝ落着き我にかへり
車内靜かになれば
窓外に月あり
煙れる景色の無限の味ひよ
燈火のチラ〳〵と飛び〳〵に現はれ

蛙の聲が喧しく聞える
あとにした歡樂の都に未練はない
おゝこの月明の田園の美しさよ
爽やかな夜の靜もるをつとりした田舍よ
そこに靜かに日々の業務に勵む人々の幸福よ
涙ぐましい夜かな

春の夜

春の夜だ
子供は寢しづまつて

輕るく安らかな寢息がきこえ
妻は燈下に衣を縫ふ
私も彼女も默つてゐる
火のいらなくなつた靜かな温い夜は私達の家にも幸福を齎らす
戸外は朧ろに煙る月夜
遠い田圃の方から蛙の聲がふし面白く響いてきこえる
靜かな、永遠に近い夜
無限の味ひを感じる夜
私と妻はこの夜の靜かさを
破るまいとするやうに默つてゐる
私は妻の下を向いて燈火に蔭になつた顏を眺める
その姿は滿ち足りて平靜である

貧しいけれど私達の周りに
春の夜の平靜な氣分は
口にし難い幸福な思ひを通してゐる
あゝ他に何の不足があらう
子供が丈夫で良く育つてさへくれゝばそれに越した幸福があるだらうか
私は何か話しかけたくつて
しかし、その言葉を出すと涙が溢れさうなので、口を噤む
妻がホッと吐息をして體を動かした
足がしびれるので座り直したのだ
「もう縫へたのかい」と自分は平凡なことを聞く
「未だまだ、中々よ、先きへ御休み下さい、もう何時でせう」
二人は言ひ合したやうに時計を眺める

氣がつかない間に時計は停つてゐる
私は安物のニッケルの目覺し時計を手にとつてねじを卷く
「九時頃にしてをこう」
「今に汽車がつくと分つてよ、先き着いた笛が七時何分のですから、今度は九時何分ですわ」
暫らくしてその汽車の音が遠くからこの町へ近づいて來る響が、聽える
停車場が近くなつてピーと笛を鳴らす
二人は默つてその音をきいて時計を直ほす
私は幸福とは
こんなものだと思ふ
平凡で何ごともないが
そこに無限の味ひがある

私は默つて只ぼんやり
女の縫ふ手先きを眺めてゐるのだ
「先刻から何なさつてゐるの」
「御前の縫ふのを見てゐるのさ」
「御仕事なさらないの、御退屈でせう」
「うん餘りいゝ夜だから、こんな晩は何もしないでゐても退屈しないよ」
「では御茶でもいれて召上れな、御菓子が一つ戸棚にとつてありますわ」
自分は喜んで立上る
「そつとして下さい、目を覺まさないやうに」
「よし」私はそつと戸棚から皿に殘つた餅菓子をもち出す
「本當にいゝ時候に成りましたわ……これでIIの着物も縫へて、この着物、遠足へ着せてやるのですよ」

「あゝ遠足か……、Hの奴嬉しいだらう」
「餘り汚いなりさせて、遣るのも厭ですものね」
「うん、さう、然う」

愛する人達

愛する人達が方々に居る
こゝに居て思ひ出すと
懐しく樂しく思ふ
ハガキを書き乍ら
彼の手に屆いた時の喜びを思ふ

心と心の通じるのを感じ乍ら

私の詩は

私の詩は日常生活のありふれた詩である
私の見、私の感じた生命の詩である
諸君と同じく私と云ふ一個の人間が、愛し、憎み喜んだことを
單純に卒直に歌つた詩である
私の詩は誰にも親しく喜ばれるだらう
私と同感の人は多いだらう
私は生涯を只より良く生き

より良く歌ひ度い
私は人生の大波に漂はされる人間である
私は悲しむ時もあるだらう、嘆く時も多いだらう
しかし私は結局生きることを喜び歌ふ人間だ
私は實在の歡喜、私の胸の中から湧く生命の歌を高らかに歌ふほど、幸福はない

一日

一日とは何だらう
私は一日の喜びを歌はう
誰にも親しい喜びを歌ふのが自分は樂しい

おゝ朝
誰か朝の清淨の美を傳へ得やう
朝の美、朝の色を傳へ得やう
かくも優しくかくも神秘な朝の喜びを歌ひ得やう
地球に滿ちる朝の爽やかな
祝福に滿ちた歡喜を歌ひ得やう
身も魂も淨化するやうな勇ましい
快い朝の歡喜を歌ひ得やう
幼年の朝、青春の朝、老年の朝
朝はいつも若々しい
朝はいつも快い
日は未だ登らない

然しもうその近いことが分る
除ろに朝は明け離れて行く
快い朝風は上天から吹き落ちて來る
少し寒い位、淨らかな天國の息吹のやうな風は
眠つてゐる家々や樹木を颯々と吹き拂ふ
朝の家々！
私の眼には今それらが映つて來る
地上の家々、神の善良な民の家々が
可愛ゆい姿で、除々に光りを增して來る
淨らかな空の下につゝましい
朝の屋根々々の樂しさよ
戸は未だ開かれず、煙は未だ擧らない

空はその上に滴る如く聖らかに青い
快活な地上の住民は目覺める
神に愛された民族
各國の子供等は目ざめる
あゝ彼等は小さい家の戸を開き窓を押し擴く
天日は彼等の上に喜々として舞ふ
人々は昨日のやうに働きに出て行く
地上に於て人々は何の爲めに働くか
彼等は何を築かうとするのか
彼らは何を最上のものと成し
何を排し何を學ぶ
私は地上の人類に就て考へる

地上は本當に神の善良な民の住居なのか
そこは淨土であるか、そこは穢土には非ざるか
こゝには調和ばかりはない
あらゆる不調和がこゝでは戰つてゐる
善のみでなく惡がはびこつて居る
平和のみでなく、動亂が多い
平和は攪亂
サタンの國は廣大である
神の善良な民はノア一人の昔と同じか
自分は否とも然りとも云へない
自分は克服すべき惡の所有者である事を告げる
自分の人格の完成は個的の惡を亡ぼして

全體の善に從ふことである
善は偉大である
善はあらゆる宗教の源である
善は實在である
物質的幸福は完全の幸福ではない
物質的幸福は不完全である
肉を滿して靈を滿たさず
利己を滿して他人を滿たさない
自分が腹一ぱい食つて滿足しても
他人はそれで餓へか滿足しはしない
實在の不思議よ
我々の此世の滯在期間は不定である

あるものは永く、或者はきはめて短かい
我々は暫しこゝに足をとゞめて他界へ去る
併し自分が死んでも
地球は死なない
人類は日々の營みを續けてゆく
死するのは個人であり
死なないのは人類である
個人の内の人類的慾望を達したもののみ
永生を得る
個人が亡びて全體が生きる
善は利己的ではない
惡の幸福は假在である

現世切りのものである
然かもその現世に於ても
美の幸福は得られない
人を傷つけて平氣なものはない
人に損させて自分が德しても
決してその人は眞の安心は得られまい
眞の幸福は得られまい
かゝる人の心の生活は寂しく荒んでゐるに違ひない
家族を餓へさせて自分ばかり樂しむ親は
何と云ふ不合理の親だらう
かゝる人の良心は痛むに違ひない
彼の愉快は奪はれて心は暗黑に苦しむだらう

虐げらるゝ者は不幸だ
併し虐げられるものゝ心のまるで光りのない暗黒より幾倍優しか分ら無い
大なる善を信じるものは幸だ
その人には惡の無力が分るだらう
惡は亡びるものである事を知るものは賢く強い
信仰の前に不信は影が薄い
善は惡に對して無抵抗である
無抵抗は敗北ではない
敗亡に見えて勝利である
異常な勝利の無抵抗である
ソクラテスは自己の勝利を信じてゐたから
惡がいかに無力のものに見えたらう

正義を信じる者は強い
惡は消滅すべきもので善は永遠に生く可きものである
惡は力のない存在！
善は偉大な實在である
善の側に惡を並べたら
その美と醜は一目瞭然だ
こんな露骨な比較はない
善は四邊はばからず輝き、惡は首垂れてゐるだらう

人々は

人々は何を目的に働くか
働くことは善だらうか
家々を作るのは善か、畠を作るのは善か
勞働は善である
併し平和を愛するものは尙ほ善である
心の爲めに働くものは善である
彼らは神の優良の民である
一家を養ふものは善であるが
全人類の心の糧をつくるものは尙ほ善だ

人類の心を漁る漁夫は
魚を漁る漁夫に勝る
人類の畠を耕す百姓は
野菜をつくる百姓より勝る
自分は彼ら擇ばれたる人々を讃美しやう
豫言者、宗教家、思想家
正義と平和の爲めの戰士
印度の爲めに正義を叫ぶ豫言者が投獄されるや
民衆は彼を救はんとして起つ
民衆は正義に從ふ
偉大なる無名の人々
彼らは侮り難い人々である

神のために事あれば立つ聖男の士である
自分は賞讃すべき仕事をもつ人々と共に
無名の人々を讃美する
君達も亦地上を飾るのにふさわしくない人は一人も無い
地に耕す者も、海に漁る者も
文明の圏外にある
肥桶を擔ぐ無智な百姓も
凡てが人類の偉大な肖像畫の中の肖像であり立派な彫刻である
ゴオホは郵便配達の像を飾り
搖藍の女を描き
ミレイは農夫の偉大な福音に滿ちた繪畫を作つた
あらゆる役割が美しい

地上を支配するのは
擇ばれた權威者かも知れない
然し地は地に於て盡されない
大なる神秘は存す
天の前には人は恭謙な赤子である
死の前には誰も苦痛を喚起す
神の救ひを叫ぶ平等の連中である
權威は物質界のみを支配しない
精神界を支配する優劣が問題だ
各自の人が各自の道を歩み
その生涯を、最上に幸福に送るがいゝ
おゝ人間の生涯、努力と精進

あらゆる艱難を破つて
名を成し業を成就する生涯
人生の存在はをろそかには出來ない
その生を最高に賣る事は自然の命令である
衣食足りて滿足ではない
深い滿足、死に打克つ道を歩むのが
人間の慾望である
戀愛の滿足
それは幸福だ
子孫の繁榮、それも幸福だ
然しそれは利己的幸福だ
最高の幸福は學んで知り

自己の完成を果す事だらう
忠實に自己の生の完成を成す事だらう
自己の爲めより人類の爲めに盡す事だらう
誰かその生涯を滿足して死んで行つたか
誰か凱歌を擧げて此世を去つたか
おゝ死！　死！　恐しい死
然して生は定まらない動搖に滿ちてゐる
自分は生の浪に漂ふものである
右し左するものである
自分は岩の如く此地上に根ざして
生の浪に當つて碎かれない强さと不滅のものを有ちたい
自分の築くのは脆い〳〵

風の方向でその位置を轉づる砂丘でありたくない
年月の巨大な手の爲めに存在を失ふ果敢無いものではありたくない
けれど凡てのものは消えて行く
消えてなくならないものは
大自然と同化し合體し得たものである

日の光

日の光りの美しさ
草を輝やかし
木々の葉を輝やかし

輝き溢るゝ戸外の歡喜
三月の大地の美しさ
草の芽の愛らしさ
草の芽の美しさ
蕗の芽は金色に萠えて
不思議な形で膨れはぢけてゐる
神秘な種と芽の繁殖と、生長よ
幼い芽達の可愛い姿の神秘
私はあらゆる木の芽と草の芽を愛す
苗床の苗の二葉の美しさ
をゝ地は産み、地は殖やし
大地は休まず、大地は創造の火に溫る

を〻上天の太陽の光りに依つて
膨れ、誘はれ、暗黑から
生の光明へと進轉する萬物の種の生長の喜びよ
嬰兒の喜びよ、嬰兒は神秘な生の深淵の中を
或る見えない手に依つて導かれ
生の大洋の中を泳ぐ
母は彼の周りを絶えず離れず
彼を抱き、彼の手をとり
彼の保育に勵む
神秘な愛のつながりが
二つの形體を結び
創造の光明は二人を繞り

地の暗夜から光明の地へ到達する
を〻生長の喜びよ
嬰兒は見、知り、動き、笑ひ、肥つた手足をさしのべる
內なる力は彼を促し彼を除ろに生長せしめる
彼は匍ふ
嬰兒の匍へる形ちの愛らしさよ
嬰兒をめぐる世界はどんなに神秘に奇しく樂しいだらう
どんなに清純で、どんなに光明に充ちてゐるだらう
嬰兒にも苦痛はある
併し嬰兒は忽ち愛に依つて救はれる
嬰兒よ、人類の幼年よ
いかなる人も通過して來た幼年よ

人よ
汝は如奈に神秘に依つて愛撫され
汝の健やかな呼吸をしつゞけて來たか
私は顧る、幼年時代の喜び
母の愛、偉大な母の功蹟は讃頌される
私の魂を形成し私の生長に重大な關係のある母の愛
或る母はその息子と離れて住む
息子は海へ遠く去つて永い年月歸らない
母は彼女の兒の事を年中苦にして
彼の生死を案じてゐる
置き去りにされた老ひたる母はこの最愛の兒の
幼い時の姿を夢見るやうに憶ひ出す

彼の聲、彼の姿
彼の特色のある癖等を想ひ出しては
いかに彼女がその息子を手鹽にかけて愛撫し
掌中の珠として愛したかを思つて涙ぐむ
自分の側に在りし日の彼女の息子の幸福を思ふ
彼女の息子の愛らしく賢かつた昔を思ふ
母は憶ふ
どんな世界へ行つても
彼女ほど彼を愛すものは無い事を
彼女程自分の息子の爲めに盡せるものゝある可きで無い事を思ふ
然し彼女はもう息子から世話して貰ひたい年である
別離の永い年月、彼女は

一日として息子の事を神に祈らない時はない
一日として彼の歸宅を考へない時はない
忘恩の子は歸らない
彼は今までも度々母に難儀をかけたが
一錢の蓄へもなく
何處の世界を放浪してゐる事か
女から女と追つて零落に零落を續けて
不幸な運命に彷徨つてゐるだらう
彼女は息子から消息を知つてからもう
年月は永くなる
海の彼方へ去つた事は知つてゐる
他國へ去つた事より深い消息もない

息子の安否は解らない
彼女は死ぬ迄に今一度彼を見たいと思ふ
寂しき寡婦である彼女は
此世に只彼女の息子より今は眞に愛するものはない
オヽ偉大なる母の愛よ
母の愛！　母の愛！
誰かその愛の地上の愛に於て
あらゆる愛の内に於て
彼女の母に勝るものを知り得やう
彼女の愛の敵は
戀愛である
息子は彼よりも身分の低い

さうして大して美しくもない女に迷つて
不義理を積んで海外へ去つたのである
オ、戀愛の力と母性の愛
その二つの引力は稀な悲劇を生むが
調和してゆく事が普通である

夕暮

夕暮の喜び、眠りにつく朧ろな大氣の中の平和の景
四季を通じて私は夕暮の快美さを歌はう
夕暮の散歩、夕暮の微妙な和らぎ

奇しく美しい微妙な心を魅するよろこび
私は涙ぐんでその美しさを讃へる
一日の勞働の終り
人々は樂しい家路へ
足も輕く、その愛する家族のもとへ歸つて行く
各々の家庭に仕事の後の慰藉は待つてゐる
空氣は人々に御飯を甘美しく食べさせるやうに
澄んで香つてゐる
まるで親切で優しい女のやうに
をう兄弟はどんなに一日を樂しく働いたか
どんなに疲れたか
夕飯はどんなに甘美しいか

夜はどんなに樂しく妻君と並んで眠るか
勞働者の家庭の飾り氣のない
辛直で單純な夕べの光景よ
妻君は膳の用意をとゝのへて待つ
一本の酣德利は膳の上に立つてゐる
足を洗ひ顏の汗を流した夫は
いかに樂しくその膳の上の盃を手にして
好物の肴に舌鼓を打つだらう
星、夕暮の暮れ惱む空に靜かにあらはれる星の優しい淸い瞬きよ
地上の勞苦をねぎらうやうに
海上の空にも、山々の頂にも、野の空にも、鮮やかに滴るやうな星は新しい世と共に生れてくる

その淸い光りその嚴かでやさしい神秘な姿
人はキリストがそこにあらはれたやうに感じるだらう
あゝ太陽が沈んで靜かだな
畠も色彩がもう分ち難くなつて
日の光の下で一日樂しく遊んでゐた人々も家路へ着いた
樂しかりし一日の終りの平和さよ
百姓は鍬を肩に、疲れて、默つて朧朧とした姿で畦道を歸つてゆく
その姿には何か人を打つ神秘な力がこもつて居る
蛙がコロ〳〵と田圃からは啼き初める
空氣は新鮮で、草の匂ひが甘く漂ふ
黑ずんだ森の中から家の燈火が靜かに瞬く
おゝ疲れたものに魅力のある夕暮よ

野の夕暮の神秘よ
腹の減つたものに夜はうんと喰ひ、飲み、眠りの床が用意される
何といふ幸だ、一日働いて不平もなく、夕べに家に歸つて、夜安らかに眠る身は
見ろ、夕暮の湧き立つ地上を、靄の中の人々の往來の烈しさを、この精力的の光景は
この人間をぶちまけたやうな地の活氣は、然うして又空のあの美しい靜かな色は……
私は時々感動して咽びたく成る
この力はどこから私の心に傳つてくるのか
突然に遇ふた光景を見たものゝやうに
感謝にをどるこの心は
をゝ愛よ、聖なる愛よ、人々が睦み合ひ、平和に幸福に暮らすことは何と云ふ美しいこと
だらふ
皆んなが心を一つに併せて樂しむことは何と云ふ樂しい事だらふ

夜

夜は神秘な冷やかな愛撫で土の上に晝間の熱を醒まして
花を冷まし、草を蘇らせ
明日健やかに目覺めるやうに
穀物の上に恵みの露を蒔き散らす
眞晝の炎熱の赫い輝きの變りに
蒼い夜は是の清淨な務めを果しに來る
人々は眞晝が地に大切なやうに
夜が偉大な務めを果すのを忘れまい
夜は人々に眠りと休息を與へるのみでなく

空氣や土や植物に多大の恩惠を施すのである
夜を通過して、晝は完全なのである
私は夜を愛す、冷やかな星は熱した身體に何と言ふ爽快な慰めだらう
私は晝の歡喜と夜の慰安を讃へる
晝が父であるなら夜は聖らかな母である

自然に就て

自然に就て學ぶことは
どんなに多量だらう
朝に就て學び

夕に就て學び
晝に就て學び
夜に就て學ぶ
感受するよろこび

優れたもの

優れたものは多い
人間の内にも
又植物の中にも
自然は夜と晝とに

素晴しいものを造る
花の美しさ、花の優しさ
花の姿は不思議である
薔薇の美しさ、薔薇の聖さ
聖母の飾り、野の花の立派さ
おゝ朝の花よ、露に濡れて
未だ半開の花の何と云ふしほらしさ
夜の床から目さめる花達の喜びの顔々
朝の淨さにたへやらず開く
神秘の唇の花
花は夜と朝からその色を貰ふのだらう
然うして晝に光明の鍵でその小さい扉を開かれるのであらう

尼樣のやうに清淨な花達
清い〳〵花達は
無垢な生命のしるしである

嬰兒

嬰兒の美しいやうに
老人も亦美しい
死の傍に立つて
哲學者のやうに老境の平和にある老人は
平靜な態度で

血の氣が多く、無鐵砲で
純潔で向きな若者に
靜かに眞理を說く
私は老人を讃美する、老人は賢い
白銀の髮長き老人よ
老人は美しい、實に美しい
彼は神秘を知つてゐるやうに
優しく柔らかに平和を說く
元氣な若者は樂しんで世故にたけた老人の語るを聞く

春の日

美しい明るい春の日
郵便配達はいつもより早く
友のハガキと雜誌をもつて來て呉れ
ゆつくり腰かけて話してゆく
煙草を喫つて茶を飲んで
梅の咲いたことや鶯が谿の方では啼いてゐる事を話し
又鞄をせり上げて
エッチラオッチラ歩いてゆく
呑氣な田舍の郵便配達よ

麥が青んで桃が咲く
明るい里の郵便配達よ
君が來てくれると
家の中が急に明るくなる
子供が受取つて私の手へ
澤山もつて來てくれる郵便を
私は机の上に積んで
雜誌を開き、ハガキをよむ
たのしい春の午後である

男と女

男と云ひ女と呼ぶ
イブとアダムは
實在の果實である
偉大なる果實である
男性の喜びよ、女性の喜びよ
兩性はその兒を產む爲にある
その兒を產む爲めに
自然は彼等に命令する
彼等は公ぴらに愛し合ひ

その任務を果たす
人類の穂を繼ぐ
男子の役目と女子の役目は立派で
偉大である
婚姻は夜約され、出産は祝福される

大なる悅び

自分は大なる悅びの歌を歌ふ
神來の感興は來り
倦怠は忽然として去る
蓄積した生氣は迸る

をゝ神來の歡喜よ
虛無の深淵の上を飛躍する喜びよ
束縛は解れて、解脫の喜びは來た
私は永遠の一瞬を生きやう
私は理法の指し示すところへ進んで行かう
私の歌を聽け、私の智能の照らす暗夜を貫く光りを見よ
噫、光りは繞る
光りは歌ふ
光りの歌ふを聽け

生の神秘

生の神秘
私の眼に見えない
形ちの無いもの
靈魂の喜びを歌ふ
盲目にも啞者にも與へられて居る喜び
文字を知らない、無學のものにも與へられた喜び
暗黑を貫く
一閃の光明
そは人々の心に喜びを與へるもの

愛
悲しむものに笑ひを與へるもの
樂しき愛
こゝに五人の人があつて
隔て無く喜び合へる愛
愛位單純な光明は少い
不和をひろげるのは憎みである
不幸を生みつけるのは憎みである
憎みは恐しい
憎みはあらゆる罪を生む
その反對に愛は
あらゆる喜びを人々に生みつける

憎は殺すが愛は生かす
憎みの顔はゾッとさせる
憎みの顔は醜悪である ―
愛の顔は美しく聖らかだ
神秘な愛
どこから來るか知らないが
どこにもそのやさしい火をともす愛
神秘な一つぶの平和の種
眼に見えぬ、然し感じ得る
神秘な働きをもつ愛
を〻愛は働く
愛は人々を幸福に導き

天上の樂園へ案内する
愛は男女を嫁せ
愛は朋友を作り
愛は敵と敵とを和解させ
不幸の力を奪ふ
愛は萬人の住家であり
憎みは萬人の敵である
憎むことの不幸よ
憎むことの悲しみよ
憎むことの苦しさよ
愛することの樂しさよ
自分は憎む事を廢めやう

愛することの憎むことに勝ることは
比喩を絶して居る
自分は愛することの至福を思ふ
心に闇なく悲しみの影絶え
無限を貫く光明に漂はされる幸よ
を〻愛の香ぐはしき匂ひよ
愛の明るい光りよ
愛は光りである
愛は純潔な人間の生命である
正しい人は
愛なくては生きられない
人がそれなくては生きられないのは愛である

愛は本能である
愛の玉座は人類生存の中心にある
愛は人類の太陽である
他のあらゆる徳行の源である
愛は増加であり、無限に通じ
憎は減退であり、息もたへ〴〵の最後である
愛の息は人を健やかにし
憎みの息は身體を害ふ
を〻愛の神秘よ
愛の奇蹟よ、喜びの源
平和と法悦の源
愛は天國のものであり

憎みは地獄のものである
愛は生の始めである
愛の天地は人間の住家である
神の善良な民の住家である
私は愛の玉座を禮拜する

喜び

喜びはここにある
喜びは壓迫のないところにある、遠慮なく
生の樂しみを味へるところにある

心の儘に振舞へるところにある
不自然の壓迫のないところに喜びはある
拘束のないところに喜びはある
不自然の壓迫のあるところに苦痛がある
人は自由に生は樂しいものである
生の樂しみを奪はれるところに苦痛はある
生の樂しみを味へるところに喜びはある
苦痛は人が不自然の狀態に置かれる時に生れる
自ら不自然の狀態に進んで入るものは馬鹿である
その人は苦痛を自ら求めてゐるので
その罪は、外界になく、自己にある
生の喜びを殺す社會は不自然な社會で

萬人が樂しめる社會は本當の社會である
生の樂しみを奪つて生きる社會は正しい社會ではない
人生は綠の野原のやうに
日の光溢れ、美しく自由であるべきだ
喜ばしき人生であるべきだ
苦しい人生ではない筈だ
苦しい人生は不自然が多いからだ

自由

牢獄は不自然な生活である

自由の拘束はどんなに辛いだらう
どんなに苦しいだらう
然し滿期出獄はどんなに嬉しいだらう
明日出獄と云ふ晩は
その幸福な人々ばかりが
別の監房へ入れられるのださうだ
そこで最後の一夜を明すのだが
誰も嬉しくて眠られないさうだ
それは想像しても樂しさうな事だ
誰もどんなにその自由となる解放の日を待ちのぞんだらう
その時が明日なのだ
不思議なやうに年日は經つたのだ

人々はその知人や、親のある人は親に
妻子のある人は妻子に逢ひにゆく
喜びを先づ胸に浮べるだらう
然うして再びこゝへ來まいと自分に誓ふだらう
あゝ自由に心に壓迫を感ぜず
重荷を感ぜず話し合へる事の喜び
不自然な壓迫からのがれる喜び
心は勇躍して寢つかれない
明日、自由になる日
をゝ自由よりいゝものはない
自由は廣い綠の野原だ
花咲き溢るゝ綠の野原だ

石と鐵との圍ひの中の生活は
何と言ふ不自然の生活だらう
あゝ綠の野原にも比へたい
人生である、樂しい人生である
愛、喜び、日の光りの滴り
世界はどんなに美しいだらう
どんなに新鮮だらう
風、風も囚はれ人には
その自由の歌が羨やましくきこえるだらう
晝も夜も希望のない牢獄は
何と云ふ惡夢の世界だらう
何と云ふ悲しい處だらう

緑の野原よ、自由の國よ
希望と幸福の世界よ
それでのみ人は生きられる
不毛の土地は怖ろしい
そこで人は孤獨で死ぬだらう
愛するものに逢へずに
くらすのはどんなに辛いだらう
人は社會的動物である
人は孤獨では生きられない
人は友無くしては生きられない
人は戀人なくしては生きられない
人生は伴侶なくては生きられない

自分の心を語り合ふ人がなくては生きられない
喜びを分てる人がなくては生きられない
困つた時はどんな人でも友達になれる
人は誰か語り合ふ人なくては生きられない
旅で偶然知り合つて、暫時一緒にゐて別れた人のことは
いつも樂しく忘れられない
その後音信不通でも

涙ぐむこと

涙ぐむことは多い

私は海に泳ぎ戯れてゐる人を見て
人間の愛らしく、自然の美しいのに目ぐんだ

旅で

私は旅をして山路で行き暮れた時心細かつた
足を早めて、村々を通りぬけ
やつと麓の町の燈火が見えた時は
喜んで涙ぐんだ
山々の黒ずんだ背の上に
凄い新月がのぼつてゐた

そんな景色は忘れられない

山の中で

山の中で茸採りに行つて
連れとはぐれた時
私は一人で心細かつた
いくら呼んでも返事がない
私はだん〳〵泣き聲になつた
向ふでも探してゐるのだと思ふと
尙早く逢ひたかつた

一人で林の中を抜けてくる時は
妙にこわく寂しかつた、私はブンブン怒つて歩いた
つれがわざとはぐれたのだらうと邪推した
小雨がボツ〳〵降つて來た
私は怒りと心細さでワク〳〵して家へ歸つた
つれは家へ歸つて私を見ると怒りつけた
「どんなに心配したか知れない、これから探しに行くところだつた」と叱つた
私は嬉しくて、かつかりして怒る勇氣もなかつた

天地

天地は柔かに
夜は薄絹をかけたやうに
月は大空に熟睡してゐる
をつとりした光りが下界に射しこみ
林の中はへんに明るく
梢には星がサファイヤのやうに煌めいてゐる
土が軟く踏む足に快くさはり
空氣が温く新鮮に肺を滿たす
どこからか花の亢奮した匂ひが漂つてくる

甘いやゝにが味のある青々した匂ひ
私は夢見るやうに彷徨ふ
町の燈火は眩しく、餘りに人が雜沓してゐて
何だか刺戟がこわいやうで動悸が昂ぶる
私は心臓ををさへて、眩ぶしい、きらびやかな
町の燈火を避けて
靜かな林の方の物蔭に佇む
オ、歡樂の春の夜よ
私は星と親しみ、人を避ける

自分の生涯

自分は願ふ
自分の生涯が悔ひなく
善き日の下に
働き勵んで樂しく在ることを
自分の生命の焰の明るく
常に朗らかに
暗を貫いて燃え
その火に依つて
暗きに沈む人達も照らし

天國さして御榮への道を歩みたい
我が願望よ、常に
偉きく、常に健やかに
義しき道へと歩みゆけ
力の無い人々が歩めぬ道を
歩み行く者に幸あれ
弱き人々の執着より離れ
汝が正しと思ふ道へ
強き兒よ、歩め

妻よ

妻よ、都會を脱れて
田舍へ行かう
幸福を求めて
健康の土地へ住はう
山は朗らかに我等を迎へん
青き地はゆく雲の影を映して
翳り照る空は我等の頭上に
四時に明るく日の熱き里へ
樹木の梢は樂しく生ひ繁り

緑滴り、花は燃え
谿は碧き淵をなし
泳ぎゆく魚も透いて見ゆ
我が憧れの土地へ行かまし
我等の内の生命の芽を
濁さず、涸さないために
我等が生は樂しく
我等が夏は緑豊かに
我等が生の終りの日に
悔ひ無く暮らし樂しまん

道は險し

道は險し
人生の道は險し
されど心落す勿れ
踏み出でし道を
いや遠く歩み行くべし

詩人よ

詩人よ
天國は汝が胸にあり
汝が生命の焰にあり
汝が焰をもて眞理を照せよ

心の暗い時

心の暗い時
心の悲しい時
そんな時私は祈る
心の闇に閉される時は
自分が惡い思ひに濁る時である
常に朗らかに
生命の火の燃えてある時
喜びである

自分よ

自分よ

常に停滯せず
常に流動せよ
常に元氣に流動せよ
惡い思ひがつまつて
暗く心の沈む時は
生命の流動しない時である
何かに囚はれてゐる時である

ミレイ

ジャン、フランソワ、ミレイよ

御身を思ふ
日沈み、夕靄は地を罩め
廣い野の上に星瞬く時
新鮮な夕の大氣の裡に去りゆく一日の光榮の
終りに自分は汝の永遠の姿を見る
汝の描ける畫布の崇高な眞實と美を思ふ
彼は聖なる姿して自然に自分を導くやうだ
善良の父にして貧しき者の味方の働き人たりしミレイよ
をゝジャン、フランソワ、ミレイよ

我は貧し

我は貧し
我が父も富みたれど
貧しく死せる時
遺産とてはなかりき

不幸な人

私は不幸な人々の事を思つた

彼等を思ふ時、私の胸は重くなり
悲哀が全勢力を以て私を蔽ふのを感じる
或晩、私は用があつて町を通つた
場末の緣日の中を通つた
そこには多くの店が、燈火をつけて道端に並んでゐた
安い玩具や、細々した日常品を安く賣つてゐた
安いはんぱものゝ化粧品とかシャボンとか下駄とが
そんな品物はよく、只價が安いので
貧しい身なりの人々がそれを買つてゐた
往來は人で充ちてゐた
荒んだ容貌の、職工風の青年が、群れて
何か求めるやうに餓へた顏をしてブラ〳〵と

道ゆく人を物色して居た
私は彼等の顔を見て急いで通りぬけた
その青年達は、自分の望んでゐる快樂も容易に得られないのに失意の色を浮べてゐた
私は悲慘な氣がした
ふと私は一人の少年の事を想ひだした
彼はカフェや活動が好きで
飲酒と賭博と漁色に興味をもち
喧嘩早いのを誇りとして
不良の徒に交る事を光榮としてゐるやうな
一人の友を
私は最近彼の母が遠い田舍で死んだときいた
その喪中に逃げ出して來たのだそうだ

私は憂鬱になつた
町は嫌ひだ
商店も利己的で
そこにゐる主人達で
餘り善い顔をして居るのを見ないではないか
單純ないゝものはこゝでは滅びてゐるのだ
現代の文明は人間を滅ぼすものだ
いかに多くの人が滅んでゆくか
現代に求めるものはない
現代の不幸と暗黑に反抗して起つよりない
あゝ皆んな貧窮が重いのだ
比較的輕いものも、いつどん底に沈むか不安な時

貧窮は人々の胸を壓してゐる
文明は人を滅ぼしてゆく
都會は人を滅ぼしてゆく

幸福

嫌ふ可きもの
憎むべきもの、醜いものは多い
けれども愛すべきもの
讃ふべきもの、美しいものも多い
人の害になるものも多いが

有用なものも多い
私は美しいもの、心を悅ばすものを
自分の友に選ばう
私は幸福を歌はう
現代人の顧みない幸福を謳歌しやう
それが諸君には夢のやうに見へたり
無用に思へるかも知れない
私の歌ふ喜びや美しさは
諸君の口腹には適さないかも知れない
諸君の求めて居るものと異ふかも知れない
併し私は諸君がわけなく得られる幸福が
實は私の歌ふものであるかと思ふ

私は夢のような美しいものを歌ふ
自然の美しさや心の喜びを主題にする
私は此世に一人や二人の詩人があつてもいゝと思ふ

風

風！　風
輝いた風景の中を
吹き廻す風の快さ
花を吹く風の明るさ
もうこれは春の息吹である

オ、風よ　明るい風よ
麥は青く、桃は紅く
辛夷は白く燎乱と咲き乱れ
日の光りは雲を貫いて
畠に落ち、風は輝いて吹く
オ、風よ、三月の輝きをもつ風よ
花の間を吹きすぎ青空に歌ふ風よ
春の天使の息吹よ

春の畠

雨が熄んで
陽が黒い雲を貫いて
明るく花を照らし、畠を照らした
陽の中に桃や白い李や發芽した樹々や麥や草の綠が一齊に輝き
空には雲が乱れ、青空が開け
咲き乱れる花の果樹の上に虹が顯れ
ミレイの春を想はせた
その神々しさ、快い風が花の木々を搖り
戯れるやうに吹きすぎて

花は翻へり、麥や草は靡き
世界がぱつと輝いた

快樂よりも

私は快樂よりも德を慾望する
肉慾の一天張り
金錢慾の一天張り
それらが人の全部と思ふものは禍だ
倫理を無視しすぎる行爲は
人ではない、動物だ

倫理

倫理を無視する
いびつな心のものは呪はれてゐる
悪を以て善に勝ち
醜を以て美に勝てゐると思ふものは
何と云ふひがんだ・いびつな心だらう

金

金があればあるで
金がなければないで
楽しみは多すぎる
金で買へない楽しみの多さ
金にエンのない楽しみの多さ

何にでも

何にでも
精力的である事は愉快である
仕事にも
又遊びにも
精力的であり、歡湧き盡きぬことは幸福である
生活と仕事とが
ぴつたり調和してゆく時の喜び
生活も豐富に精力的に
仕事も豐富に精力的に

自然よ

自然よ、汝は
歡湧き、盡きず
樂しきかな

野兎

夜の銀座からの歸り道
もう更けて、ねしづまつた

朧月の白い田舍道を歩いて來ると
フト道に動いてゐる黑いものがある
猫かなと思つてそばへ寄つて見ると
黑い野兎である
自分は「をや」とをどろいた
野兎は道をチョコ〳〵と走つては
何か考へるやうに耳を立ててうづくまる
自分は捕へてやらうと思つて
そばへ近づくとチョコ〳〵と逃げる
まるで追ひかけられるのを樂しんでゐるやうに
捕へさうになると、ぴよんととぶ
道の側には並木が列んだ小川がある

若し追ひつめてそこに兎が落ちるといけないと思つて
用意しい〳〵追ひかけて
自分は蝶々でも捕へるやうに
帽子を手にもつて
野兎を帽子で伏せやうと追ひかける
二十分位そんな事してゐたが
どうしても捕らないので
可笑しくなつて捕へるのは止にした
然うして、朧なはつきりしない
影のやうな兎がほの白い道を走るのを見てゐたら
可愛ゆくて涙ぐんだ
靜かな春の夜の往來に

自分と野兎とたつた二人で
追ひかけつこしてゐるのを
悲しいことのやうに思つて

春の朝

もう目がさめた
百千鳥の聲が窓外でさかんである
赫々たる春の太陽は
地平線から焔をあげる
金と焔の春の大王よ

をゝ春の朝燒けの樂しさよ
雲雀は清らかな空にチルチルチルと
靈妙な歌を流してゐる
一曲唄ひ終ると畠へ下りる
もう夜は過ぎた
驚くべき清新さに輝く春の日は始る

雲雀

雲雀の歌の美しさ
何と云ふ可愛ゆいやさしい樂しい靈妙な施律だらう

チル、チル、チル
清らかな畠の上の靈妙な大空で
囀つてゐる一羽の雲雀
おまへの妙へなる歌が詩にあらはせたらと思ふ
おまへは獨りで樂しく歌つてゐる
いつも元氣に
いつも倦まず
人のことには目もふらず
おまへの命じられたことを
一人樂しんで歌つてゐる
清らかな照り輝く世界の雲雀よ
微妙な澄澈とした歌ひ手よ

御前の胸には聖い火が燃えてゐるやうだ

雲雀

雲雀よ
おまへは小さい巣の中に
ぢつとしてはゐられないで
廣々とした世界へ飛びあがつて歌ふ
俺もさうだ
廣々とした清い空や太陽の輝く方へ
小さい巣から飛ぶ出すのだ

雲雀

靈妙な雲雀の歌よ
チルチルチル！
妙なるメローデーの快さ
百姓は彼を捕らうとはしない

春の日永

長閑な春だ

麥畠の中をゆく
馬と車の可愛ゆさ
小さい前の車の輪と
うしろの大きい車の輪とが
コトコト長閑に廻り
日永の道を
馬も喜んでゆくことよ

自然

自然は靈妙である

この靈妙さを畫にあらはし
詩にあらはすことが出來たら
自分は滿足だ
靈妙極まる大自然の前に
感極つて自分は跪きたくなる者だ
殊にこの頃の春の日
田舍の廣々とした野の空の下を歩いてゐたり
又は月の夜に戸外を歩いて咲きこぼれてゐる花等見てゐると
異樣で靈妙な
造化の神の腕前に隨喜渴仰の涙が流れる
感嘆に盡きる
感極る、一言もない

只自分は愛の潮が塵の身にも高まつて歡喜の中に友の手を握る

月

月は登る
靈妙不可思議の月よ
太陽が沈んで
水を打つたやうに靜かな
野の果てに端麗莊嚴の月は登る
雲雀の歌はやみ
遲く歸る百姓の車の音も絶へ

寂とした萬象を照らして
精靈のやうな月は
豐かに悠々と登る
自分は感極つて禮拜する

生命の花

生命のある花の美しさ

樹木

樹木の美しさ
生命がさかんだから

生命あるもの

生命のあるものは美しい
天が與へた地上の萬物
生命の美しさ

貴いもの

貴いもの
美しいもの
それは生命
それは目に見へない天のものだ
物質以上のもの

樹木

樹木を見よ
彼らはつくられたまゝに伸びる
神のごときもの

生きるよろこび

限り知れない
大きな世界に

生きてゐるよろこび

生命を

生命を讃へよ
實證あるこの感觸

桐の花

草原に

桐の花が溶れてゐた
美しいと思つた
拾つて匂ひを嗅いで歩いた

青葉

青葉を見ると
何か食べたくなる
青葉を見乍ら
羊かんが食ひたい

路を歩き乍ら

路を歩き乍ら
青葉を見てゆくと樂しい
これから樂しい夏になるのだと思つて
何だか嬉しい

青葉の庭

しるし袢纏の植木職人が庭で働いてゐた

土を踏んで青葉の庭に立つ姿が
氣持良ささうで樂しかつた

生命

「生命を知るものは
幸福だ
生命を知るものは
神秘を知る」
宗教は生命を愛することだ

小さい並木

野中の小さい樹達が
萠え出す若葉で清けな輕裝をしてゐる
麥畠の側に
まるで一群の少女ら　うた
樂しい小さい並木の清楚な姿

木々

木々は輕裝した
夏らしい

花賣り

町へ行くと
花を賣つてゐる婦人がゐた
髪は束ねて

質素な身なりで
道に新聞紙を敷いて
その上に西洋花をのせてゐた
美しい草花は賣れ行きがよかつた
少女が來たり
會社員らしい若い男が來たり
學生が來て買つて行つた
女の人にはいゝ商賣だと思つた
さう醜くないその婦人に厚意を感じた

樂しく

厚意の感じられる女や男は多い
美しく樂しくくらしてゐる人々
さう富んではゐないらしいが
平和に隣人を愛して
身分相應にくらしてゐる人々
私は彼らに厚意をもつ

子供と犬

田圃の方へゆくと
道の草原に子供が二三人花を摘んでゐた
そのそばに犬が
子供らを守るやうにねそべつてゐた
然うして退屈したやうに
小さい主人達の方を横目で見てゐた
子供達は花を摘んで歸りかけた
犬は猛然と立ち上つて嬉しさうに
彼等の前に立つて麥畠の方へ走つた

まるで彈丸のやうに白い犬は走つた
子供らは手を拍つてはやした
狂ふやうに犬は
麥の中へ突進して姿を隱したり
思はぬところへ姿をあらはしたりして
主人の足ののろさを笑つた
見てゐて氣持がよかつた

子供

子供は子供の

個性に從つて
その好むまゝの生活に生きることを
自分は喜ぶ
自分で發見した
喜びに生きよ
自分は彼の自由を束縛はしない
自分は子供が
語ることをきいてゐると
樂しく成る
彼が樂しんでゐるのを見ると
涙ぐましく成る
彼が何をしやうと
自分は彼の心の喜びを
靜かに聞いて樂しむ
自分は子供に自由を與へる

途上で

麥畠の中に架畫を立てゝ
六號の新らしいカンバスに
美しい色を塗る青年よ
快活な氣分になる
天も地も晴れた

六月の田園の靜かな世界は
今君の制作の慾望を燃やし
君の眼と手は急がしい
リズムのやうに働く
君は古い麥藁帽子をかぶり
ブルースは油で汚れてゐるが
君の姿は初夏の若さのやうだ

初夏

初夏だ

御嬢さん達が
パラソルをさして
田舍へフラ〳〵御出ましだ
何んて目の覺めるやうな
若葉でせう
御嬢さん達よ
セルを召して
新しいパラソルを
い〻恰好におさしになつて
御歩きになる御姿は
實に粋です
パラソルの下で御美しいたらありません

若葉もよろこんでゐます

ゴヤ

ゴヤはえらいと思ひます
人間を手玉にとつてゐるやうに思ひます

女

女に馬鹿にされたくはありません

女を馬鹿にしてやりたい
けれども駄目です
女には敵ひません
女は腹が座つてゐます

若葉

若葉を見ると
戀がしたくなる
粹な若葉がさうさせる

夜の道

友の家を訪ねて
夫婦の歡待に引きとめられ
親切なもてなしと
温い氣持のいゝ接待に醉つて
感謝の心を抱いてかへる
靜かな郊外の夜の道
若葉の中をくゞつて
麥畠の道を通り乍ら
夜の軟かい空氣に魅せられ

いつまでも心が樂しく歩いてゆく

夜かへる友

夜かへる友を
停車場まで送つてゆく
さ霧が立つて
町の燈火が美しく
一日樂しく過したあとで
もう二人は餘り話さないで
默々と停車場へ急ぐけれど

二人は感謝の思ひに滿ちてゐる

友の妻

友が妻君をつれて來た
初めて見る友の妻
家の妻子とも馴れ
睦じく話し合つてゐる
自分と友は側で仕事の話をしたり
時々彼女らの話の仲間入りをして
樂しい思ひに皆んな感謝した

金魚

金魚屋の前に
子供が集つて
赤い金魚が樂しさうに泳ぐのを
熱心に見て喜んでゐる
幼い子供の喜びの姿
私も足をとめて一緒に見物した

家の周り

自分の家の周りは
麥畠と若葉の森と
明るい空と小川と草原と
無數の白い靜かな路が
魅力のある明るい野の方へ
少女や若者の足を誘ふ
明るい空に若葉の間を
麥畠の中を縫つて
四つ五つパラソルが

輕く浮んでゆく
鮮やかな色彩が
みづ〳〵しい若葉に調和して
まるで祭りのやうに美しい

樹々よ

樹々よ
お前達はみんな
青々として
踊るやうな恰好をしてゐる

樂しさうに明るい空の下で
虹のやうに輝いたり翻つて
腕を擴げて空を抱いてゐる
踊れ樹木よ
月夜の靑さめた樹木よ

麥よ

麥よ　麥よ
輝いて　輝いて
どんな道も人つ子一人通らない

眞晝の熱さに
肩をすり合せて
浪のやうに太陽の光りに毛をこすれ
麥の毛よ
熱い口に匂へ

雨の夜

雨の夜
流石都會の人通り
濡れた燈火が

濡れた道に映つて
何だか人が想はれる

桐の木

新らしく生へ出す
花や葉の美しさ
花が未だ散り切らないのに
散つたあとからは
青い葉がニヨキ〳〵て來て
面白い桐の木の美しさ

桐の木

桐の木よ
花を咲かしたな
しかも匂ひのいゝ紫の花を
愉快な桐の木よ
小さい時から育てられて
いつか賣られるお前には同情する
しかも御前の花盛りは美しい

筍

筍よ
御前の姿は
實に變だな
化物のやうだな
薄暗いところに
ニョキ〳〵と伸びて
青い芽を出したりして

麥

麥は健やかに豐かに村を包んでゆく
日光を戀ふるものゝやうに快活に青々と明るんで
麥は豐かに貧しい村を包んでゆく
麥の中に包まれた百姓家の美しさ
麥の中の樹木の快活な姿
麥はまるで廣い海のやう
麥の中に人や家々や太陽は沒してゆく
オヽ一面の麥、太陽の麥
麥の上の空の一片の雲も無い朗らかさ

オ、麥！ 麥！ 快活な麥
豐かで新鮮で明るい麥
伸びてゆく麥
風はそこに來て彼らを
輕るやかに搖すつて
彼等を愛撫するやうに見える
風はそこに來て日中樂しく遊ぶやうに見える
麥を見ると俺は明るさを思ひ、快活に成り
豐かな廣々した麥のために、歌ひたくなる
麥よ、伸びよ、健やかに樂しく
暑い日、黃金に熟して苅り倒されるまで
彼等の道中の樂しさよ、またお前の勇敢さよ

まるで人の爲に生えてくれるやうな
お前麥よ
俺は有難く思ふぞ
健やかな麥、快活な麥
霜の置く嚴寒の季節から辛苦し乍ら
しかし快活に人の爲めに盛んに生えてくれる麥よ
俺は喜ぶよ、麥

初夏

家を出ると

靜かな生垣つゞきの横丁が
どこへでも通じ
眞晝だのに人も通らず
實に閑靜を極めてゐる
カン〳〵輝く澄んだ道と
涼氣の通ふ樹の下の道と
木々が優雅に初夏の
澄み渡る光りを浴びて
清らかな枝々を安らかに自由に生々と明るくのばしてゐる
オヽこの木蔭の光りの明媚さ
この光りの透明さ
溺むものもない深い落着いた

淨らかな感じ
俺は眞晝の沈默が好きだ
至る處に伸び生きてゆく
草木のつぶやきが聞える氣がする
神祕めくものが俺の全身に傳はり
俺を歡びにたつぷり浸してくれる

緑の繁み

緑の繁みが
神祕めく蔭をつくり

一本の小徑は
草にはさまれて
樂しげに靜かに横つてゐる
誰も氣のつかない
この横丁の閑靜さ
俺はこの道を樹木と草とに圍まれて
午後の閑靜さをたのしんで通る

黑い蝶

涼氣の滿ちたうす暗い綠蔭の光りの中を

威嚴と淑やかさと
艶めかしい姿を絹の黑いものづくめで包んだ
豪奢な富んだ貴婦人のやうに
ゆつたりと健康さうに
小さい蝶のやうに狂ひ廻らず
日向の暑さを避けて
華やかな黑い蝶
神祕めく庭園の奥深く逍遙つてゆく

初夏

初夏の豊かさ、快さ
樹木の夢、濃やかに深く
まるで神祕の園の開放されたやう
樹木の黄金時代
至る處變化して
空を優しくする樹木の壯麗さ
洋々たる大氣と樹木の間より
天樂の聞ゆる心地
おゝ雄大の眺めよ

空に燃えてゆく綠の
累々たる盛んな湧出

樹木達

若々しい思ひを包む
雄大な樹木達
まるで實在か幻か疑はれる
神祕な樹木の姿

花が散つて

花が散つて
輕快な若葉と變つた
木々の樂しさ
重荷の花も目出度く咲かして
これで一安心と云つたやうに
奔放に繁つてゆく
その愉快さが木々には溢れてゐる

繁み

だん〳〵繁みが深くなる
綠蔭の色が濃くなつて
健康の思ひが天地に溢れて來る
女も男も健康さうに
生々として歩いてゐる美しさ
樂しい力が湧いて來る
毎日が樂しい
毎日が希望だ
希望の方へ、自分の憧れは向いてゆく

健康な樹木

快活で健康な樹木
どこにあんなに溢れる
生氣を持つてるか
不思議のやうな美しい樹木
花が散つて
青葉に變つた姿の美しさ
その變化の神祕さよ

草

草がやさしく大地に生えてゐる
まるで大地が夢見て
生れたやうな優しい感じだ
大地はいろ〳〵のものをつくる名人
土を輕蔑するな

樹や草

いかに樹木や草が
大地にぴつたり調和してゐか
ちやんとそこに生れたところに
優しく氣品をもつて生えてゐる
彼らはうろたへず
天然のまゝに生きてゐる
靜かにやさしく

木々は

木々は皆んな
小さな可愛らしい優雅な
花よりも魅力のある
軟かい小さい若葉を
枝々にくつつけて
全力をあげて靜かに
生々と立つてゐる

春の夜明

フト夢がさめると
もうしら〻〵と夜が明けかゝり
ガラス戸の外の樹々が
白い靄の中に溺れてうすぼんやり見える
未だ世界は靜かに曉の夢を見てゐる
自分もうと〻〵と夢現の境にゐる
とその靜かさの底から鶯の聲がきこえた
外の鳥よりも早くもう鶯は目覺めて
靜かな春の曙を歌つてゐる

自分はその美しい聲をきゝ乍ら
亦靜かに眠つてしまつた

若葉の奥で

幽邃な若葉の奥で
鶯が靜かに歌つてゐる
彼女は落着き拂つて
魅力のある聲を樂しく響かしてゐる
天與の美音を浪費せず
時々啼くのが神祕にきこえる

鶯

優しい鶯が晩春の
木立の奥で歌つてゐる
靜かで艶で清新な
若葉に包まれた家のその庭園で
自分は樂しく息を潜めてきいてゐる
幸福がそこらに滿ち〳〵てゐるやうだ
鶯はその力に魅せられたやうに歌ふ
神秘な音色！
幸福を一杯集めたやうに

ひつそりと
しかし生々した神秘な靜かさがこもつてゐる
庭園の沈默を破つて惚々と歌ふ

野の逍遙

毎日野から野へ飽く事ない逍遙をつゞける
若々しい初夏の爽やかさに浸つて
至る處に創造と努力の溢れてゐるのにをどろく
林間や道端で晩春の草花の色とり〴〵に
入り雜る草叢の美しさ

樹木の優しい生命に充ちた枝ぶりの
密な豐かさを仰いで感嘆する
何と云ふ魅力のある樹木の姿勢！
未だ整はぬ夏の希望が枝々の間に溢れ
自然の王國の威嚴と魅力を展開する
ヲヽ牧歌的の眺めよ
自分は樹木の枝の觸れ合ひ
岐れる豪壯なうねりに感嘆し
藝術と自然の類似を思ひ
實に見事に繁茂する草や樹の生長に驚く

小景

窓から見ると
唐黍の青い畠が見へる
その向ふに平野の空
白い夏雲の頭がモク〳〵見へる
素晴らしく膨脹して
大陸的の感じのする雲だ
だん〳〵伸張し、擴充し
大空に脊をのばしてゆく
限り無く廣い空が青く澄んで、鮮やかだ

燕が雲から落ちたやうに勇しく翔つてゐる

夏だ

自然を見てゐると
元氣が湧く
夏だ

太陽はのぼつた

震災の思ひ出

愛するもの

愛するものが
完全に自分のものである
事を知るよろこび
まじり氣ない樂しみ

併し心は暗かつた
あんな寂しい夜明けはなかつた
山の上から横濱全滅の焼跡を見た時の氣持
幾人の人が火中に亡くなつたのか
亡魂のたゞようやうな
靜まりかへつた氣味惡さ
避難者は群れて、水貰ひや
糧食の仕事にとりかゝつてゐた
一飯の食にありつく事が
今日の生命をつなぐ事だつた
生色のまるで無い
不氣味な荒涼とした沈默の中で

私はぼんやりして考へてゐた
周りに青い腹の減つた人達の顏を見乍ら

震災の思ひ出

二日も飯を食はず
水ばかり呑んで
まつ青な顏して
フラついてゐる娘があつた
妻が「あなた大へん御顏色が御惡いやうですが」ときくと
然うなので、丁度あつた飯を上りませんかとすゝめると

急にワッと泣き出した
さうして飯を食つたら急に元氣づいて
私達のそばに別れるまでゐた
地獄で佛と云ふ感じは
あの時味つた

平和

平和
愛
よろこび

を讃美す

喜び

我が家の喜び
子供と母と父の喜び
同じ屋根の下にある喜び
父の膝の上にゐる嬰兒の喜び
嬰兒は父の膝の上に抱かれつゝ
見知らぬ人々に笑顔を見せる
夜夢見てゐる子供を眺めつゝ

不思議な慈愛に親の心は温められ
感謝の念に燃ゆるよろこび
おゝ我が家の喜び
冬寒い戸外から父は歸り來て
温い家庭の空氣にふるゝ喜び
室内のよろこび、庭園の喜び
親しき樹木と花の喜び

星滿つ空

星滿つ空を眺めてあれば

親しき誰、彼の如奈にしてあらん等と
思ふ靜かなる夜なり

小景

朝の涼しい内
露の下りた道を跣足で踏んで
青田道を通り
蓮の咲いたのや
百姓家の垣の朝顔等を
見て歩く樂しさ

青田の向ふを汽車が通るのを見る
煙が面白く房々乱れてなか〳〵消えない

秋

身にこたへある秋を
俺は讃美する
だらけた氣持の
引締る秋
何かやりたい

夕燒

雨上りの夕燒の美しさ
深山の雲か、錦の御旗のやうに
或るものは長く
或るものは小さく
東にも西にも流れなびいて
大膽な色彩に輝く麗はしさ

星

溢れこぼれるやうな星だ
或るところには群れて澤山
或るところには一つ

月と星

月の眞下に星一つ
妙なる月の光を浴びて

麗はしく輝いてゐる

我家

田舍の我家に歸つて居る懐しさ
妻子の傍にある安らかさ
戸の外の草原に啼く蟲の音も
戸を出でゝ見る星屑の輝きも
稻田の眺めも凡てが懐しく身にこたへがあり
たのしい安らかさに滿ちてゐる

秋が來たら

秋が來たら
妻と二人で辨當をもつて
茸狩りに山に行かう
去年の秋の事が懷しく想はれる
彼方の山、此方の山と渡りめぐつて
ふいと思はぬ峠に出て
遠い景色をよろこんだり
二人が完全に同じ喜びに同化し合ふたのしさ
美しい山の中の林で

草を分けて茸を探す面白さ
靜かな身に泌むやうな秋の日の快さ
木々は黄に、紅に色づいてゐる
「何と云ふいゝ色でせう」
さう云つて妻は櫨の深紅の葉をむしりとつて見たりする

妻の傍に

妻の傍に
二人並んで座つて
話してゐる子供を見ると

妻の幸福さうな姿が羨ましくなる

子供は

子供は栗を持つてゐる
栗が實るのはもうぢきだね
家に栗の木のないのが殘念だな
母さん、山へとりに行かうね
Mの方へ行けば澤山あるね
と夜話してゐる

一家揃つて

夜一家揃つて
いろ〳〵の話しに耽るたのしみ
空想家の子供
實際家の妻
中々面白い

コスモス

妻が丹精して
小さい庭に植ゑた
コスモスや鳳仙の列んだのを見ると
嵐で倒されなければいゝが
一寸心配だ

涼しい朝

朝、涼しい内
蜩が遠くで啼いてゐる
もう夜が明けるのか
馬鹿に今夜は早かつた氣がする
蜩は實に遠くで啼く
どこか夢幻的の感じがする奴だ
メルヘンの森を想像する
あいつは森の妖精達の仲間だらう

月見草

月見草
妙にこいつも夢幻的な奴だ
蛾が來て黄ろい花に
一生懸命ぶつかつてゐる

蝶の眠

蝶々はもう

ねてゐるのと
俺の子供が
草原を散歩するときく
草に留つて眠つてるのを探して見せてやる
蝶は默つて眠りをさまさない
靜かに草の莖にとまつて羽を
合掌するやうに合はして眠つてゐる
その眠りの靜かさ、天使のやうだ

暑い日

暑い日
手拭をさげて
泳ぎに濱へゆく
毎日日課のやうにゆく
海へゆく砂道の暑さも
丈夫になる氣がして妙に樂しい

意志の弱さ

丈夫にならう
軀を鍛へやう
さう思へつゝも不養生する
肉慾もつゝしもうと思ふが
酒もつゝしもうと思ふが
意志の弱いこと位不愉快な事はない
心にもない事をやつたり
誘惑に負けたり
腹が立つ

朝顔

朝の涼しい内
となりの垣に
朝顔の水色の花が一輪
靜かに咲いてゐる
誰が彩つたのか、あの色
今咲いたばかりの花の
まだ萎れない勢のある美しさ

小景

青田の向ふの
なだらかな低い山の脊が
夕榮で紅に彩られ
澄んだ空が實に神々しく底しれぬ濃い青さ
云ひ知れぬ敬虔の念に打たれる

庭の草

夏だ
狹い庭にも
種々の草が縱横に
手もつけずにのびてゐる
向日葵が脊高くなつて
大きな花と葉をつけて立つてゐる
眞晝の王のやうに
彼は私の庭の花の中の一番自慢のものだ
ヨオホの墓から分けられた種だ

不親切に思へる位少しも手入れしないで放つてゐるが
皆んな元氣に生長してゐる
つくばね朝顏も金雀草もその他澤山

涼しい朝だ

涼しい朝だ
この朝には蟬や花がどんなに澤山
生れて來るだらう
生れて來るもの萬歲

蟬

蟬よ、蜻蛉よ、花よ
生れて來るもの萬歳

頭が濁る

頭が濁る不愉快さ
澄みたい、澄みたい

夕映

素晴らしい夕映を見た
火のやうに輝く雲が
いくつにも裂けて、何十條
黄金の空に強い調和を奏でゝゐる
色彩の大膽さ
思ひ切つた構圖に驚く
神の表現の奔放さ

自然のごとく

自然のごとく
大膽であれ

月と河

月が河の流れを照らしてゐる
書間より流れが早いやうに
激した波がすごく見へる

夏の河

私は夏の河が好きだ
河鹿の笛とせゝらぎと
兩岸の緑の繁みの戰ぎと
日ねもす河は樂しい元氣なリードくりかへす
潑溂とした若い魚は身を閃めかして
早い流れに樂しく身を躍らして群がり湧く
をう清純な夏の溪流の美よ
水は滯らず勢よく走つてゆく
どこかの主人が飼犬を泳がしてゐる

毛深い彼の愛犬は
馴れてると見へて、躊らはずに水に躍り込んで
草や花に蔽はれた岩に沿つて、
暗い流れに首を擡げて泳いでゆく

溪流

溪流の中の苔蒸す岩に泳ぎ着いて
腰から下を流れに浸してゐると
太つた鮎が何匹も流れを登らうとして
鰭を動かして閃めき泳いでゐる

急流を喜んで彼等は樂しさうに
光つた腹を翻へして
岩の周りを繞つて
苔をつゝいたり
水中の私の足を不審に思つて
見に來てあわてゝ去つたりする

蟬

裏の樺の大樹で
降るやうな蟬の聲

何萬の蟬か分らない
實に旺んなオーケストラ
空も破れるばかりの合唱だ
樹は灼くやうな光りの中に
まるで煮へ返るやうに全身焔だ
その壯麗さ、弛みもない夏だ
蟬達は皆んな勝手に出放題に歌つてゐる
ミンミンも油蟬も法師蟬も
聽いてゐると哄笑したくなる勢だ
各自が力みかへつて唱つてゐる
勝手氣儘だ　それでゐて不思議に調和して
快い眠りを誘ふメロデーがある

これは見事の合奏團
どの合奏團にもこの樺の連中は負けはとるまい

星

星を見ると
未來を思ふ
たのしい夢を
美しい未來の夢

晝の月

晝の月が
青空に半分埋れたやうに出てゐる
靜かな空だ
月も顔を出さずにはゐられないのだ

つくばね朝顔

Yから貰つた

つくばね朝顔が
ふえた〳〵
花の乱れ、莖の乱れの美しさ
暑い日盛も見てゐると涼しげだ

月夜

蟲達も歌はずにはゐられまい
この月夜

月夜

この月夜
喜ばずにはゐられない
遠い〳〵空の隅まで
夜は優しく晴れてゐる
やさしい星があちこちで瞬く
嬉しさが胸からこみあげる
大きな宇宙に生かされてるよろこび
こんな晩は一人でも幸福だ
幸福が充ちあふれてるやうに思ふ

都市

都市！　大きな都市
あらゆる勢力の集合地
人々はその中で生きその中で死ぬ
一歩も都市を出ず
田舎を知らずにしまふ人もある
私には都會は希望と失意の大きな牢獄のやうに思はれる
都會には金が落ちてゐるやうに思つて田舎から出て來る人
功名と戀と金とをのぞんで雲集する無數の人々
榮達を望む人々と失意の人々が押し合してゐる競爭の激甚の都市の恐ろしさ

運命に見離された人と運命の幸福兒と
戀と功名と慾の人生の希望と失意の修羅場！　それが都市！

夏

暑い午後である
數十哩先きの
無限の田畠と綠の森の平原の彼方に
砂色の高層雲が徐ろに
崩れたり盛り上つたりして動いてゐる
すばらしく白熱して眩ゆい白雲は

見てゐる間に伸張して
澄み亘る限り無い青空に
鮮やかに白く輝いて擴る
夏らしい豪壯な想ひが湧き上る
遮るものもない空から
太陽の直射する地面は
まるで熱してカン〳〵してゐる
そこに野菜は暑さを喜んで盛んに生長してゐる
オヽ匍匐する西瓜、唐茄子
青い廣い葉の笠を冠つた南瓜の蠻的な王子
赤い髭を垂らした青い服の唐黍の兵隊
何千の茄子、何萬の生瓜や南瓜や

凡て人間の手につくられ
人間の勞役で收獲される巨大な産物
果實と穀物と野菜の群よ
神様が滑稽な趣きを與へた形態の面白い野菜達
それらの地上の産物は
日輪と月と諸星との祭の供物のやうである
大きな造化の倉から溢れる夏の産物である

餓

餓へてはたまらない

子供を餓へさせてはをけない
それで母親は一生懸命で働く
戀はもう覺めて了つた
子供の父親はどこへ行つたか分らない
女は再婚ものぞまず
恥ぢも見榮もなく餓へに追はれて働く
同情のある人々は稀れで無い人達が多い世の中で
女の腕で根限り
資手もなくて働いて
この不景氣に二人の口を糊し、着てゆくことは
さて、難しい
おゝ貧窮よ

人口の多い大都會、競爭の激甚な
この利己的な人生で、運命から見離され
生活の聲に鞭打れては
眠りから覺め
露命を支へてゆく哀れさ
餓へに窶れて子供に飲ませる乳もとぼしく

星

見給へ、見給へ
あの星を

自分は友に指さして路上に友と佇んだ
畠の中の森の上に
形ちの大きな
金色の星が傾き沈んでゆく
「あの星だよ
西方に早く沈む星と云ふ
ホイットマンの歌つた星は……」
と友が云つた

朝のよろこび

朝のよろこび
小鳥も花も知つてゐる
赤ん坊も知つてゐる
知らないのは俺一人のやうだが
この俺も稀に朝起きしてよろこぶ

暑い

暑い
遮るものもない日盛りの空
無限に續く畠
キウリの棚
唐茄子畑、茄子畠
唐黍の列、ごぼう畑、馬鈴薯
その間を道は
人も通らず白く續いてゐる
小さい草叢でスイッチョが啼いてゐる

グラ〳〵するやうな熱氣の中で
野菜の花は咲き、實が育つてゐる
唐黍の廣い葉は無遠慮に繁り溢れて實を隱してゐる
大きな花は中々立派だ
自分は野菜の展覽會でも見てゆく氣持で
いろ〳〵の野菜の藝術に感心する
いかにも食物らしい實のある花は
素朴で鄙びてゐて面白い

野生の花

野生の花
伸びて夏の香を吐く草
誰も美しいとも思はなさうな雜草の花
それも夏らしくて好きだ

ふくろ

裏の農家の欅の樹に
ふくろが棲んでゐて
毎晩星が出るとボーボーと啼く
靜かな夜の聲は惡くない
あのいたづらな他の小鳥ををびやかす鳥とは思へない
陰氣なやうで可愛らしい
ふくろが啼いてゐると云つて
自分や妻や子供は寢耳をすます
伽噺に出てくる惡ものも
どこかユーモラスである
夜は眼が見へても晝間見へないと思ふと
不幸な鳥でもある

小景

こゝには元氣に草が生へてゐる
あすこには悄れた男が休んでゐる
激しい勞働に疲れて
眼が凹み、頰が削け
眞夏炎天の下に
あぶら汗を流して働いてゐる

青いスイチヨ

青いスイチヨが
家の中へ這入つて來て
燈火にくる蛾をくわえて食つてゐる
蛾はもう半分呑まれて
翅をバタ〳〵やり粉を飛ばしてゐる
スイチヨの奴、燈火へ來る蟲をとりに入つて來てゐたのだ
私は粟立つた
蛾はばた〳〵翅を動かし必死に戰つてゐる
私は團扇へのせて戸外へ棄てた

夫婦揃つて

夫婦揃つて
仲が良く
他人には親切で
樂しく生きてゐるのは美しい

夜

夜子供達は早く眠る

自分が眠るのは未だ中々だ
子供達は早く登つて沈む星のやうに
もう眠りの國にふんぞりかへつてゐる
その代り彼等は朝が又早いのだ
星の位置も今はもう大分傾いた
おやぢもそろ〳〵眠るかな

夜の子供

夜子供は樂しさうだ
燈火に飛んでくる蟲を捕つては玩具にしてゐる

何にでも興味をもち、愛をもつて退屈しない
蟲の滑稽を發見したりして喜んでゐる

草原

草原へ行きたい
耀いた綠の草と花とで滿ちたところ
樂園の一隅のやうなところ
そこに座つたり歩いたりして
俺を清めたい

朝の清さ

朝の清さ
いろ〳〵の小鳥が
日に輝く空を
啼いて飛んでゆく
すばらしい樂しさうな聲だ
森へ飛んでゆくのだらう
自由な小鳥らめ
己も出かけるぞ
御まへ達に負けない詩をつくつてやるぞ

海

海も見たいな
あの潮の青い
渦巻くやうな海

汽船

煙を吐いて沖をゆく汽船を見る
靜かに、いつの間にか

消えて了ふ蒸汽！
煙も見へない
何だか面白い

草花

一寸魔のやうだ
花を見てゐると不思議になる
生きてゐるのだから不思議だ
人間がつくつたのではないから不思議だ
人間にはこんなものつくれない

自然には驚く
今更に驚く
こんな小さい花ばかりではないか
こんな小さい花だつて中々の傑作だ
美しいから不思議だ
季節々々で枯れたり生へたりするから不思議だ
小さい寶だ
見てゐると氣持がいゝ
可笑しい
すまして咲いてゐる
ます〳〵可笑しい

渡來の花

花は殖へてゆくらしい
子供の時に知らなかつた花が
近頃は矢鱈にある
どこかの植物園か温室にでなければ
なかつたやうな花が
この頃はザラに野原にある
渡來の花が
日本在來の草花より多い位だ
しかし都會の近所にしか見られない花だらう

小景

ざぶん、ざぶんと
波が石垣を打つ
舟蟲がザラ〳〵走りまはる
磯臭い匂ひがし
風が絶へまなく吹く
今海は西日で赫々と燃えてゐる
荷足や蒸汽や帆かけ舟が
大きな河口の方へ集つて歸つてくる
煤煙が空を染めて凄いやうな

人口の多い都會の一隅を想はせる
ざぶん、ざぶんと打つ潮の音は氣持がいゝ
夕潮の豐かさ
帆が赤く染まつて綺麗だ

或る時

斷崖の上に登つて行つた
老いた松や檜が繁つて
草が荒れてゐた
そこには枇杷が實つて居た

友はかけ登つて
その甘い實をもぎ取つて
下に居る私に落してくれた
二人は斷崖の上に並んで腰を下して海を見た
洋々と開けた海
沖の方は今夕陽を受けて盛んに輝いてゐる
眼の下では白波が立つてはのろりと
靜かな水面を岸へ向つて走つては
途中で消えてなくなる
遠くの岬が晴れて快い色に染まつてゐる
涼しいまるで寶玉のやうな
妖々とした神秘の色を帶びてゐる

雲がその上を漂つてゐる
乾草の匂ひが盛んにして
軟風に吹かれて涼しくなり
松の木で鳴く蟬のこえに
眞晝の炎暑を忘れて恍惚とした
友も自分も枇杷かなくなると
木へかけつけてはもいだ

町の夜

妻や子供と町へゆく

八百屋で枇杷やさくらんぼや
茄子や南瓜を買ふ
妻は呉服屋のショウ井ンドウの浴衣を見る
町はもう夏らしくなつて
小川のふちでは大人や子供が集つて
花火をあげてゐた
田舍だがどこか艶な町の夜だ
別に見るものもない、人通もすくない
下駄屋ではそこらの娘が下駄を買つてゐた
理髮床では客が混んでゐた
瓦斯に細い虫がかたまつてるのが見へた
枇杷とさくらんぼとを

子供に分けてやり
月のいゝ畠の中を歸つてくる

がちやゝよ

がちやゝよ
お前は野趣があつて
中々好きだ
夜通ると
籔の中でそれは宴會のやうな騒ぎだ
いつか鳥が群れてゐる池のある森の側を通つたら

夜の盛んな音樂會に驚いた
鳥も多く集つてゐると夜騒ぐらしい
田舍だから人がまるで通らず靜かだ
たゞがちやゝばかりが籔をゆり動かすやうに啼いてゐる
合唱のやうだ
すばらしいリヅムで
激しくなつたり、だんゝ低く
遠くなつたやうになつてもう止めるかと思ふと
又一息休んだやうに
勢を新に盛りかへしてくる
それをきいて星ばかり輝く田舍道を歩くと
へんに愉快だ、野蠻な味がある

自然の奇しさを感じる

スケッチ

燈火で包圍された街路の
色彩と光りの霧の中を酒で活氣づき亢奮した人々がゆく
至る處に消費好きな
都會人の嗜好に向いた商店が
華やかな窓飾を列べてゐる
食物でも玩具でも化粧品でも洋品でも
女の欲しさうなものが輝いてゐる

男にねだつて寶石を買つて貰つたり
化粧品を買ひに夫や戀人と歩いてゐる
喫茶店は香水の匂ひ、色彩の明り
どの卓子も婦人の美しい衣裳と顏で圍まれ
菓子や飲物か花か果實のやうに
夜店には一寸氣紛れな人々の心をそゝるやうに
大道で賣る珍らしい玩具が出てゐる
子供より大人が喜びさうな玩具が出てゐる

愛に燃えたもの

優しく、平和で
愛に燃えたもの
萬人が愛に調和するやうな
深い涙の詩がつくりたい
強がりには分らない
どんな強暴で、分らずやで
頑固な罪深い人間の心にも
やさしさと和らぎを與へ得るやうな詩
そんな詩がかきたい

自分は自分で

自分は自分で自分を責めてゐる
この上責めてくれるな

罪深い自分は

罪深い自分は
かたくなゝ心のもち主である自分は
この強がりと空威張とを廢めた時

本當に心の内に神の聲をきけるのだ

神の聲は

神の聲は
自分達の心の内にきこえる
ハンブルに自分に歸つた時
永遠の生命は自分の心の内に歸つてくる

やさしい心を

やさしい心を失つてゐる時が實に多い
この時は神に見離されてゐる時である
自分の罪を素直に
瘦我慢や負け惜しみをしないで
悔ひ、惡を欲しない時
自分は救はれる

やさしい平和

自分の一番のぞむものは
やさしい平和である
萬人が幸福と愛に一致することである
神の人生であり、神の自然である

善には

善には抵抗出來ない

純情の前には頭を下げる

まごころ

まごころには動かされる
まごころは愛である
神にふるゝのはまごころである

責められると

責められると
反感が起る
愛されると
まごころが動く

理屈も何も

理屈も何もない

愛、まごころ、神
それに動くのが
人類だ

力強い

力強いものや勇ましいものもいゝが
優しいものもいゝ
暴君は困るが
賢い王様や
義に強く心は優しい英雄等

純情で平和な
優しいものが書きたい

自然

自然を見てゐれば
誰か心に惡が抱けやう
心に曇りがなくなり
平和な愛に涙ぐみたくなる
大地は美しい
聳ゆる山、流れる河

村あり、畠あり
道あり
空あり、雲あり
然うして家あり
人々には愛があり
野川へゆくと
水の上に
誰か捨てた
けんけが二輪
鮮やかな色をして
水から咲いたやうに浮いてゐて
美しかつた

可憐な花の死！
至る處に死はある
靜かに死ぬ花や虫の哀れさ
生者は來て死を弔ふ

梅の木

梅の木に
青い實が少し結んだ
葉蔭に見える樂しさ
青き實の成れる樂しさ

何となく可愛ゆい實だ

菖蒲

菖蒲が咲いた
美しいと思つてゐる間に
もうあとかたもない
咲くのも不思議、散つたのも不思議
花の生命の短かさ

蟬

蟬が啼く
子供の時を思ひ出す
夢のごとく思ふ
子供の時
庭にあつた木々の姿や
樂しく甘い記憶

木々の姿

木々の姿で
妙に忘れられないのがある
愛し見馴れた木々の事は
今でも思ひ出す
しかし他の人に愛されてゐると思ふと
少し嫉妬も起る
昔の家に他の人が住んでゐるのは
いゝ氣持はしないものだ

子供

子供が集つて楽しさうに遊んでゐる
どんなに楽しいのだらう
喜びの子供ら
畠の中をかけ廻つてゐる姿の可愛ゆさ

夏

夏は楽しい

今年は海にゆけなくも
森や野や畠で
涼しい夏を過したい

楽しみ

死すべき人間に
楽しみの與へられてゐるよろこび
心静かに楽しめることの多さ

友

孤獨でゐるより
親しい友と
交り往來してゐるので
いゝ仕事も出來るのだ
良い友がゐなかつたら
得るところもすくないだらう
愛し愛されるものがあつて
いゝ仕事が出來る

安心

安心して仕事したい
安心を得るのがむづかしい

友

友に會ふ喜び
愛を持つて
語り合ふ樂しみ

母

自分は愛を負うたまゝだ
自分の足りなかつた惡つた、心に責められる
どんなにもう懷しく思ひ
愛したくつても
自分の心が通じないところへ
母が行つてしまつた悲しみよ
自分がどんなに母を愛してゐたか
それが通じてくれゝばうれしい
母も喜んでくれるから

自分は見棄てられたやうに悲しむでゐる
利己的だつた自分
つい安心して、母のところへ足の向かなかつた自分が悔ひられる

菊

菊よ
地上の花の中でも
氣品高く、優れた花である菊よ
古くから人間に愛されて
圓熟した立派な富んだ花よ

私は他のどの花にもこれほどは強く
熱烈な愛を有つ事は出來ない
おまへは不思議なほど私の花に求める
立派さと美しさと氣品と
非の打ちどころの無い感嘆を強めてくれる
おゝ菊よ
おまへは今年の地上の花の最後の花だ
春から夏へかけて無數に咲いた花の祭の
一番最後の花は菊、おまへだ
それ故に神はおまへの中に
これが最後の熱烈な愛を注いだのだらうか
私はさうだと思ふ

菊よ
私は御まへに滿足する
おまへ以上の花は求めない
おまへは永く咲き續いてくれ
どんな田舍の籬にも
おまへは咲く事を拒まない
感心な花よ
おまへの麗はしい姿で
この花の最後の祝典を飾つてくれ
おまへの種類は實に多い
未だこんなのがあるのかと思つて驚く程
新しい星のやうに多く

それが亦一つ一つ實に美しい、實に神々しい
菊よ、私はおまへの熱烈な焔に感激する
どうしてこんなに私が熱誠だか、自分の氣がしれない
それだけおまへの神秘な美しさが強く
私遂に極度の歡びを與へるのだらう

秋の讃美と詩人の役目

秋よ
私は秋を讃へやう
私は今酣な秋の眞只中に居る

私は紅葉の照り返へす
美しい焔の世界に居る
おゝ秋よ、私はどんなに優れた美を
おまへから見出したか
私は今は驚異と感激の中に生活してゐる
私は優れた花の王である
菊の饗宴に連席した
しかし私の觀たのは富豪の陳列會で見たのではない
私は獨り、或時は妻と一緒に
田舍の籬や畠の中で開かれてゐる
その花の宴に足を停めたのだ
私はその後、感激と驚異の

焔の中に生きてゐる
私は菊に依つて熱烈の愛を呼び覺まされた
おゝ秋よ
私は楢の紅葉の
燃えるやうに優れた時雨を見た
日光の中に輝く彼らの熱烈な
神に捧げる祈りのやうな感激の姿を見た
私の歡喜よ
私達はこの地上に優れたものゝ豐かなのを喜ばう
私達がこの十月の季節を愛し喜べる事は
何と言ふ感謝だらう
私は驚く可き優れたものが

この秋の地上に盛大の宴を張るのを
空しく過してはならないと思ふ
人々よ、愛することに熱烈であれ
この地に與へられた富と美を
見ないでしまふ事は何と云ふ損失か
私達が輕蔑したり、默殺してる美が
どの位この世には多いか
それは發見する度びに
數を加へてゆくのだ
美は數へ盡せない
知れば知るほど殖へてゆく
私の知らない美が

未だどの位有るか知れないのだ
どの位優れたものがあるかも分らないのだ
それは自然の中にも人間の中にも無盡藏である
私は今新しく秋の美に感激するのだ
詩人の役目は
その美を發見し
その美を改めて紹介する事だ
それは天が詩人に與へた役目ではないか
此の世にある美
人々が輕視したり、かん過する
美を見出して
それを紹介するのが詩人の役である

かくて自然は
詩人の目を通し心靈に依つて
この世にその美を認められるのだ
私は美にして
認められないものはないと思ふ
それはいつか見出される
いつか新らしい詩人の眼にふれて
その美が歌はれる
私の使命は大切だ

海の小景

一隻の汽船は落着いて進んでゆく
遠く月明の大海原の圓の中を
小さく小さく針のやうに細い船軀で
星は登り、又沈む
船長は古い望遠鏡で
神々しく廣大な、靜かな宇宙を見渡す
ほろ船は決意があるものゝごとく月光の世界を南下する
水平線に輝く島かと見ゆる
煌々たる星の方へ

神々しい巨大な畏れの中を

友が死んだ

友が死んだ
彼は戀をして得られず
詩をかいて認められず
病ひを得て
小學校の教師をやめられ
廿六で死んだ
短かい不幸な一生であつた友よ

よく春の日、學校をやめて病ひを養つてゐた
彼は河の畔りに來て
こゝの景色が好きだと言つて
考へに沈んでゐた
河の向うには桃が咲き菜の花が咲き
低い山が明るく圓らかに聳えてゐた
彼はそこで戀を話したり病ひの事を話した
かと思ふと彼は仕事のことを語り出して希望に燃えた顏をした
友よ、君は孤獨で死んで了つた
とうとう淋しい墓になつて了つた
君の墓には誰が來てお參りしよう
君の墓には學校の子供達が來ては

君の恩顧を思ひ出しやさしい涙をそゝぐだらう
君が愛した子供達は
君を忘れないだらう
戀に破れてから君は子供達と遊ぶのを
一番樂しんでゐたらしい
然し病ひは君を子供達から離して了つた
田舍の人は病ひを恐れる事がひどいから
君は淋しかつたらう
しかし君は養生もしたり
又死ぬとは思つてゐなかつたらしい
君の希望、君の戀
あゝ君は此世で何も得られなかつた

しかし君はもうあきらめて
笑つてゐるかもしれない
友よ君との交りは深くはなかつたが
しかし君を思ふとなつかしくいろ〳〵の事を考へるのだ

働いてゐる人

元氣に働いてゐる人がある
自分の貧しいことも氣にかけず
ひとより着物の粗末なことも氣にかけず
ひとより自分がすぐれてゐるとも思はず

苦しいとも思はず、悲しいとも思はず
心樂しく働いてゐる人がある
さうして働いて、暇になると
眼鏡をかけて
本を手にして默つて讀んでゐる
頭の禿げた靴屋のおやぢ
よんでゐる本は何かしらない
バイブルではなささうだ
併し自分は感心して見た
小さい仕事場と店と同じ粗末な家で
燈火の下で熱心に本をよんでゐる老人の姿は
たのもしいやうに愛が湧く

初秋の庭に

初秋の庭に
芙蓉が咲き
萩がこほれ
時々風が來て
木立をゆする
百舌が來て歌ふ
友がたづねて來て
詩を見せたり、畫を見せる
庭に面して居ると

自分の心も落着いて
いつも平和で樂しく
いつまでこの生活をしてゐても飽きさうもない

秋

秋はいゝ
秋はいゝ
秋は平和で靜かで
萬物がやさしく、自然に感化されて
人の心も哀れみ深くなる

私は秋のやさしさを愛す
木々を吹く風の音までやさしい秋だ
私は秋を自分の詩の中へとらへたい
私は初秋の山の中を一人で歩いてゆく
獨り旅はわけても秋の哀れを深くする
清い山の空氣は平和で
もう薄が生え、木々が色づいてゐる
朱泥のやうな漆や櫨が肆な強い色をつけるのを愉快に思ふ
私は又街の柳がもろくもちり乱れ
桐の葉がカサ〳〵と重り落ちるのを見る
秋よ、おまへは短い間私達を樂しませて
又どこかへ隱れ去る

短命の花達よ、萩よ、葉英雲よ
支那美人を思はせる瀟洒な芙蓉よ
沈思にふさはしいのも秋である
私は太陽が木立の褐色の葉裏に輝くのを見乍ら
枯れてゆく草や色づく木の葉を心からよろこんで見る
夏の緑よりも春の色よりも私はその美を愛づるのだ
秋日和の爽快さ、私は二三の友達と六郷の川の堤を歩く
河の向うに薄が群れて
太陽が慈愛深く照らしてゐる
靜かな世界に私は恍惚となる
雜草の中からスイ〳〵と伸びて白い穂を開きかけてゐる
薄の美しき風情

百姓家の軒にはあかざや唐子が紅を流し
鶏頭が外國の武官の服裝のやうに
花も葉も眞赤に燃えてゐる
やさしい藤紫の野菊は紋章のやう
そこにもこゝにもたわわに花をつけ
こまかな葉と勁い莖をたわめてゐる
赤まんまは可愛しくなるほど地をまつ赤にしてゐる
彼岸花は焔のやうだ
私は鄙の花も庭に栽培された菊の王者も讃美する
私は又郊外の道でぴつたりした細いズボンをはいて鞭を輕くもつて
私の快い野を輕快に走らせる遠乘の夫人を見る
又犬をつれた狩獵家が薄を分けて出てくるのに逢ふ

又私は貧しい詩人のやうな現代ばなれのした案山子を見る
夜は又秀でた月の光りが
田の面の草の葉の露に輝く
佗びしい田舍めく夜を私は逍遙する
狹霧のこめた方へ、靜かな長い夜を、私は恍惚として歩む
木立や畠の畔の唐黍子の姿が面白い
月はやさしく棚曳く雲の上に靜かである
星は遠く小さい
秋！　萬物をやさしくする秋
私は秋から學ぶことが多いのだ

散歩の途上

いつの間に景色はこんなに變つたのだらう
野は苅られてサッパリと廣々してゐる
畠のものを運んで去つたのだらう
道には轍のあとが深く殘つてゐる
道ばたの枯草の中には哀れな野菊が散りもしないで枯れてゐる
最後まで咲いてゐたのだ
花と綠に滿ちてゐた野はあとかたもなく
枯草の匂ひに滿ちてゐる
私は淋しく散歩するのだ

愛人もなく
しかし心は希望の大波に滿たされて
大空を見乍ら
自然は淋しい時
人に希望を湧きたゝせる
孤獨であればあるほど
人は神の聲をきいたやうに
希望と自信に勇み立つ

雨の夜

雨の夜である
雨の音をきゝ乍ら
妻と話してゐると
實に平和で無事である
いつまでもこの平和がつゞいてくれ
木々はすつかり葉を落されるだらう
花壇の花はあらされてしまふだらう
しかし私の心は傷まない
私の心は平靜だ

痛ましい氣は起らない
私は雨の音をきゝ乍ら却つて樂しく
妻と靜かに話してゐる
たゞ今晩は少し早く寢やうと思ひ乍ら

父が生きてゐる時

自分は父が生きてゐる時
よく父が一人靜かに
机のそばで本を讀んでゐるのを見ると
あんなに年とつて

未だ何か知りたいのかと思つたり
何を要求して讀んでゐるのだらうと思つたりした
しかし人間はいくつになつても
何か知りたいのだ、何か學びたいのだ
益に立たうが立つまいが
何か求めずにはゐられないのだ
何か良い事を聞きたいのだ
自分達の間でも噂はいつも榮えてゐる
それも何か知りたいからだ
その要求が人間になかつたら
人間は進歩はしない
その要求がある限り

人は幾つになつても成長する
人間は生長したがるものである
いくつになつても尙成長力の强いものは
讃美すべきだ
七十八十のミケルアンヂエロ等を想ふと
悲壯である
九十になつても尙北齋は成長慾に燃えてゐる
成長慾に燃ゆるもの
自分は汝を讃美する

夕映

畠の中に立つて
夕映のうつり變る空を見る
雲の形ちも色も
いつの間にか變化する
いつの間にかいろ〳〵の色に
いろ〳〵の形と感じに變化する
變るごとに美しい
だん〳〵美しく變化する
然うして三日月があらはれ、星があらはれるまで

私は恍惚として空を見てゐた
平和と安泰と優美は
こゝ畠の中に來て得られる

喜び

身ぶるひするやうなよろこびが
私の身體を通つてゆく
靜かなやさしい喜びが
私の魂を子供のやうにあやしてくれる
美しい畠や

その中にとび〳〵に立つた樹木を見てゐると
涙ぐましい程嬉しくなる
祈りたいほど心が優しくなる
平和と喜びと愛とあるところ
それが人間の住むところだ
それが此地上で味へる
そのよろこびよ

樹木よ

樹木よ

安泰と平和の姿よ
さかんな夏の精氣を吐いて
恵み深い大地を祝福する樹木よ
おゝ、御前を見て、私は喜びに涙ぐむ
御前のやさしい姿には
安泰と平和と喜びが輝いてゐるから
眼には見えぬ喜びが
深くも繁つた數多い葉から
私の精神と魂を輝やかしてくれるから

或る晩

今晩は珍らしく
妻の母が來て泊つてゐる
子供達も「おばあさん〳〵」と喜んで
明日は祭日で學校が休みなので
遲くまで、話したり、はさみ將碁をしたりして喜んだ
珍らしく私も家族と夜を過したので
今夜は安心して良く眠れる
床へ入ると子供も御ばあさんも
驚くほど早く眠つて了つた

おばあさんは田舍者だから
きいてゐると可笑しくて笑ひたくなるほどの
丈夫さうな大きな鼾を立てゝゐる
皆んな
樂しさうだ、皆んなよく眠る
あゝ平和よ、安息よ
子供の上に、妻の上に、家内の上に
我が貧しい一家の上にありますやうに

しやむの娘

昔
自分の家にしやむの宮樣の娘が
四人、先生に連れられて遊びに來た
十五六を頭に十二三の姉妹は
私や妹達と歌留多をとつて遊んだり
庭を散步した
一番上のリイさんと云ふ娘は
四人の中でもすぐれて美しく
やさしい顏だちで

その上ふざけ屋で一番元氣だつた
リィさんは皆から好かれ
よく恥づかしがらずに日本語で
御國の話をしたりした
リイさん達は先生の塾にゐるので
日曜でなければ來なかつた
リイさん達は學校を卒業して御國へ歸つた
もう今頃は立派な御母さんになつてゐるだらう
リイさんの事は未だよく覺えてゐる
細面のやさしい
軀つきが弱々しさうだつたが
元氣の溢れてゐたリイさん

鳥のやうにいゝ聲のリイさん
歌のやうに可愛らしい聲で話したリイさん
その美しい聲も忘られない
リイさんのことを想つて
一寸幸福な氣持になつた
しやむへ遊びに來て下さいと
御別れに來た時云つたつけ
行きたいなとその時思つた
リイさんの好きだつた自分は
リイさんも日本に來てゐた頃のことを
時々思ひ出すかも知れない
リイさんよ、幸福であれ

秋の花

秋の花は大好きだ
芙蓉も、野菊も、萩も
やさしみがあつて
見てゐると心が澄む
靜かに咲け、秋の花

夕暮

妻が留守で
頼んで行つた乾しものをとりこむ
日が落ちて澄んだ空に
遠い星を見た
乾し物を一まとめかゝえて見惚れた

郊外の道

電燈の眩ゆい街から
夜更けてかへつてくる
暗い郊外の道
心は急ぐ
だが空には星が清い
田圃の中の小川の橋の上へくると
一休みしたくなる
橋の杭に腰かけて
暗い田圃の向ふにちらばる人家の灯を眺め

闇の中でマッチを擦つて煙草を喫ふ
地上の燈も、天上の星も
實に靜かだ
夜の世界の不思議な靜かさ

消息

友よ
君も父となりしか
君も余も父となりて
老ひゆくも又樂し

僕の兒は我等の手に餘るほどの腕白なり
二人とも元氣すぐれて
いたづらはげしく
妻も僕も困りゐる
されど僕らの小さい時にくらべては
この腕白もさのみ驚くに足らざるべし
僕らも父母をこの如く困らせしなるべし
君の父となりしは愉快なり
君も又兒の愛に目のなき方なるべし
君の樂しきさま眼に見ゆるやうなり
つゝしんで喜び申す
いつも御親切なるマダムによろしく

消息

僕は元氣なり
相變らずの貧乏にて
好きな繪もあがなへず
それのみか少し殘念位のところにて
他は至つて元氣なり
詩作は怠らずはけみ申し
少しは上達したりと自惚れ居れり

幸福なりし日

フランス展へ行つた
會場の前で約束した友がもう先きへ來て居た
コーモリをさして居た
小雨が森を濡らしてゐる日だ
自分は外に二人の若い友と行つた
友の家へ來た招待券で四人共入つた
入口でミレイのエッチングを數點見た
寫眞で見なれたものが多かつたが
オリヂナルで見て更に感動した

コローも見た、カリエールの素描もあつた
同じ部屋でルドンの美しい線の
不思議な淨い感じの出た馬に騎つた人の素描に
皆んな感心して、眼を集めた
不思議な世界を見てゐる氣がした
同じ壁でロダンの美しい淡彩の女の裸の素描を見た
椅子に腰かけて眞正面のが一番感心した
友は日本に來て見た素描の中で一番すぐれたものだらうと云つた
あつち、こつち見て
彫刻室に入つた
ブルデルのアナトール・フランスの肖像の前に立つた
枯れて圓熟した老フランス

慈顏に會ふ氣がした
その時友が「あれ」と小聲で言つて指した
室の最中に金色のヘラクレスが
岩に足を突張つて
半月のやうな弓を空に張つてゐる
巨軀が自分の眼を驚かした
ヘラクレスの顏は神々しく若々しかつた
若者らしい半神の像は金粉で塗られてゐた
自分達がそれに驚嘆してゐる時
入口の雨の降る中に
ロダンの歩く人が聳えてゐるのを見た
自分達は滿足の頂點に達した

東京の空を背景として
小雨に靜かに濡れてゐる歩く人
自分達はそばの茶店へ入つてアイスクリームを飲んで休み乍ら見た
何だかそこにゐるのが夢ではないかと思つた
自分達は又會場を自由に歩きまわつた
バルザックとカレエの市民の首
ロダンの傑作が嚴かに室内を見てゐた
尊い有難さに涙ぐんだ
幾度もそばへ近寄つて
その貴い作品を眺めた
只もう感心した
さうしてかゝる貴い吾らの憧れの

巨匠の作品に接しられた光榮と喜びを心の底から感謝した
友は出口でエハガキを何枚も買つた
自分達は又來ようと云ひ合つて雨の中に出た
雨はさかんに森の樹々を濡らした
自分達は晩は帝劇のデニスデニションの踊りを見る約束だつた
一人の友は先きにそこへ行つてゐる筈であつた
自分達は二科のビッシエルを訪ねた
それから雨の中を廣小路に出て
御成街道の浮世繪屋をひやかした
そこで友は曉齋の肉筆の下畫の集つた本を買つた
北齋のいゝ版の富士の風景と瀧を見た
力が湧いた

北齋の瀧は驚くべき太いリズムで溢れ、漲り落ちてゐた
山もあの瀧が落ちても崩れさうもなく思へた
富士のは前の湖に倒影してゐるのだつた
實に靜かな澄んだ美しいものだつた
どつちも欲しかつた
夕飯を簡單にして帝劇へ行つた
金の部合で三階へ行つた
友は來て待つてゐた
デニスの踊りは美しく、亢奮して拍手した
布哇島噴火山の女神やエーソナの幻想は特に美しかつた
幸福なりし一日よ
目のあたり美しい貴い藝術を見られた自分は

それらの作品を忘れないだらう
それらの作品から受けた至大の感銘は
自分の心を富まし力に溢れた藝術の泉を掘つてくれるだらう
この日本から
美しいものゝ生れる日
もうそれは現に生れてゐるが
それらの良き美しいものゝ大成の日は
日本も馬鹿には出來ないだらう

案山子

案山子が田園に立つて
雨風にさらされてゐる
侘びしい秋雨の中に
破れた夏帽子を冠つて
貧しい詩人のやうに
滑稽な威嚴を保つて

秋の月

月よ
澄みわたる秋の空の
秀でし光りの月よ
草の葉や田の面の
地上の露に宿りて煌く月よ
あゝさやけく尊き月の光りよ

朝霧

朝、窓からのぞくと
すぐ近くも見えない位の霧だ
電針柱も樹立も畠も道も
遠い茶色のやうに靜かだ
畠向ふの道を通る人が
牛を曳いてゐる
牛も人も霧の中に
影のやうに靜かに映る
すぐ見えなくなつたが

霧の中で牛の吠える聲が聽えた
爽快な朝の野の香りを思はせるやうに

百舌

百舌が啼く
けたゝましい聲が
澄んで靜かな空氣によく響く
その聲をきくと
心が爽快に引き緊つて樂しい

御祭見物

明日は日曜なので
子供をつれて町の祭を見物にゆく
外へ出ると夜氣が冷えて
單衣では風邪をひきさうだつた
しかし空氣は爽快で
十日ほどの月が實に美しかつた
町へゆくまへに田圃の中を通ると
道がぬかるんで幾度も引かへさうと思つたが
稻田の露に映る月の光りが實に美しく

月と星が鮮やかで家へ歸るのは惜しかつた
遠くには霧に包まれて人家や樹立が
町へ入ると軒提灯が美しくつらなり
泥濘つてゐたが賑やかだつた
どこも祭の夜の氣分で人出と燈火に賑つて
自分達の眼を喜ばした
往來には屋臺が出來て
その前は通れないほどの見物が混んでゐた
或るところでは茶番を　或るところでは神樂をやつて居た
子供と一所に群集に混つて見たが
神樂は面白かつた
締太鼓の音や笛の調子をきいてゐると

夢の思ひ出に誘ひこまれた
神樂を見てゐると
子供の樽御輿がワッショ〳〵もんで來た
大人が提灯を持つて指揮したり世話してゐた
子供も大人も熱狂してゐた
見物が神樂の方をそつちのけにして見惚れてゐた
自分達は先へ先へと歩いた
軒提灯が兩側から照る中を
ところ〴〵に御神酒所が出來て
町内の者が集つて將棋をさしたり
五目をやつたり又御馳走をならべて
酒を酌み交してゐた

或るところには活花の陳列が出來てゐた
家族づれの連中が幾人も通つた
その祭の本社はづつと遠かつた
そこまで行けばもつと賑やかで店も出て
人出も多いのだらうが
自分達はい〻加減にして家へ歸つた
だん〳〵淋しい通りを通つた
提灯は矢張りついてゐたが、人出はなく靜かだつた
蠟燭が滅つて暗くなつたり今にも消えさうなのもあつた
子供は疲れて、末の方は
をんぶしてくれと母にせがんだりした
祭の夜は更けてゆく

田園へ出ると月は高く登り
一層冴々しく、地上の露に輝いた
自分は美しい夜の景色に感心した

カフエ

ドヤ〳〵と自分達はカフエに入つた
若い友が四人
自分達は生ビールを飲んだ
忽ち十二三個空のコップが
卓に並んだ

金がないので料理は食はず
豆を嚙おつては
人の噂や冗談を云ひ合つた

乞食詩人

いく度も餓えに迫り
いく日も斷食をし
寒さと餓えと戰ひ
見る影もない襤褸衣破帽の姿で
それで富を嘲り

貧しいもの〻友となり
それで美しい詩をつくり
天然を愛し地上の天國を夢み
子供のやうな心をもつて
天國の門をくゞつた詩人
誰かしらないが
そんな詩人を讃美したい

不便な田舍へ旅しよう

畠の方へ行かう

暢暢とひろがる土地を見に行かう
美しい色と線で作られた
陽の當る畠で一日を自由に愉快に遊ばう
澄んだ空氣の中で日を浴びて
一日働く百姓の樂しい姿を見に行かう
あんな老人も働いてゐるよ
足腰がまだあんなに丈夫だ
それで百姓娘にはなか〳〵優物もゐるよ
亭主はコチ〳〵痩せこけて
その女房は美しい肉體をして
磨きあげたら
すてきな美しい代物になりさうなのが土だらけになつてゐる

それが妙に魅力がある
自然は驚くよ
見て美しく味つてうまいものを造るんだからね
ね、君、女は傑作だ
都會では個々の美がわからないが
田舍へ來ると露骨だね
强壯な勞働で鍛へられた女の美は
又一種特別の魅力があるよ
一寸女神と云つた感じだね
王候貴族の女をしのぐやうな
堂々たる美があるよ
尻の減つた首の折れさうな腹の凹んだ

醜い體格の女は困るよ
力が體にあつてそれで
自ら優美さのある女
そんなのが百姓にある
それは兎に角
都會でばかり街路をうろついて暮らすのは毒だ
たまには田園の澄んだ空氣を吸つて
暢んびり心を樂しませるのは
有益の事にちがひない
僕だつて街路の美は知つてゐるよ
飽きるほど都會は漁つたからね、しかしだね
カフエの惡い趣味や濁つた空氣には

僕の神經と良心とセンスが許さないよ
人工たつぷりな吐きたくなるやうな
白粉をこて塗りのすれつからしのウエートレスなんか
僕の趣味にはあはないね
をう田舍よ
便利でない田舍よ
不便なところを旅行して回る楽しみよ
文明と流行からは
コウも遅れてゐる田舍には
昔乍らの純朴な氣風が今尙殘つてゐる
そこを君旅しようではないか
何を好んで都會に戀々として

病菌のうぢや〳〵ゐる中で暮らしてゐるのだね
賢明の君にも似合はない
よろしく都會を離れ給へ
文學や詩はもう君そこには無いよ
最高の詩は都會にはないよ
病的なさん〴〵他人のつかひ盡した
なめ糟だらけのミューズはゐるかしらないが
僕らの望むやうな清新無垢のミューズは
孤獨で野原をさまよつてゐる
田野へ行かう
澄んだ鳥の聲がきこえるよ
昔乍らのゆかしい花が

今もつゝましくマリヤ様の飾りのないやうに咲いてゐる
綺麗な小川が
愉快に走つて唄つてゐるよ
ね愉快な旅をしよう
ほこりのつまつた肺を洗ひ
汚くなつた胃の腑を洗つて來やう
僕らは今が自由だ
妻がないもの
若さは君、至る處で歡迎されるよ
都ばかりに女はゐないよ
すれつからしの喰べかすばかりが
ウジャ〳〵してゐる都會の娘なんか

君、それは比べものにならないよ
あんな奴等は捨てゝ行かう
あとで勝手に泣くがいゝよ
すぐ翌日からは他の男と
面白可笑しく暮らせる奴等だよ
まあ見て見給へ、論より證據だ
田園の少女よ
それこそ本當の戀を知つてゐる
すれつからしには色と慾とはあつたつて
本當の詩も戀も解りはしないよ
あんな奴等につかまつて
一生を後悔に送りたくないから

不便な田舍を旅しよう
山を見たり峠を越えたり
暫らく旅に身をまかさう
暢氣に快活に
太陽と靑空と土地を友として
行かうぢやないか、我が友よ

詩作

詩が生れる時は
美が見へた時だ

美を感じた時だ
感じなくては詩は生れない
だから詩のかけるのは
美が見へたよろこびだ
頭で捻つても
美は生れない
我々は因習で
自然に馴れすぎてゐて
心がもう躍らなくなつてゐる
心の表皮が硬くなつてゐる
それが急に生々しく
純粹に自然が感じられる時

自分達は新しく驚く
因習が破れて
魂でぢかに自然を味へる
その刹那の法悦を
自分は靈感と呼ぶ
さう云ふ瞬間が永遠だ
さう云ふ瞬間が若し無かつたら
我々は退屈ばかりしてゐなければならないでせう
だから詩人が永遠に子供で
心の表皮の固まらない人と云ふのです
我々は心の表皮の固まるのを恐れたい
ぢかに直接に自然が感じられなくなり

不正直に不純になる事を一番恐れませう
文學的に教養された人の詩が
ものゝ解つてゐるわりに面白くないのは
水々しくものを感じるより
自分の教養に邪魔されて
正直に自然を感じられなくなつて
概念にばかり執着するからである

朝起きると

つゞけざまに
詩が十かけた
悦びに燃へて家を出る
秋晴の東京は美しい
悦びに燃へて町を歩いてゆく
詩がかけた喜びが
自分を得意にして
貧しいのも忘れて
元氣に飛び歩く
この喜びを知らない
詩人は氣の毒だ
いつ會つても

「どうも書けない
どうも頭が良くない」
それでは困る
詩がかける喜び
自分が王様になつたやうに嬉しい

冬の太陽

冬の太陽は實に好きだ
朝、都會の屋根の上に
靜かに昇つてるのを見ると

歡んで雀躍する
この郊外の畠も道も
霜溶けでグチャ〳〵だ
さしも凄じい昨夜の凍てが
カラリ晴れて
空は玲瓏、あつちこつちの屋根で雀がチョン〳〵
長閑さに満ちた温い朝
俺は冷たい新鮮な空氣に觸れて
うつとりと喜ぶ
威ありて優しい冬の太陽は
俺は懐しくて大好きだ

美しい娘

少女よ
おまへはいつ見ても美しい
いつ見ても優しく清らかだ
まるで御寺からの歸りのやうに
嚴肅な顏して通るね
そのくせチラ〳〵と
眼にだけ浮氣をさせて
若い者に道で出會すと
可愛相な程切なけに

胸に大波を打たして
悪いものでも見たやうに
下を向いてしまつて
眼に餘る素通りをして
本當に氣の毒になる
少女よ大膽におなり、大膽に
つゝましやかなをとなしい顔は
もう當節は流行りませんよ
けれどお前はどこか見所があつて
神様に守られておいでのやうだ
信仰深い娘さん
悪魔に氣をつけなさい

當節の若いものは危險ですよ
それとも若いものゝ悪口云ふと
お立腹ですかね

少女を見て

島の中を通つた娘さん
どこの誰かは知らないが
彼女の住んでゐる地面よ、祝福あれ
彼女の側へ寄つたら
どんな女だつて無作法で馬鹿で醜く見へてしまは

あんな立派な娘が一體今迄どこにゐたのだらう
あんな人が此世に同じ空氣を吸つてゐるとなると
大分此世の價値が今朝から上つた
俺もしつかり考へ直ほさなければならない哩

眠りよ

眠りよ
さつぱりとした
一人の床に
靜かに我を眠らしめよ

僧侶の如く靜かに
禁慾の床に
この熱き罪もつ我を眠らしめよ
夜も晝もよく業慾の火に燃へる
淫らなる焰よ、消えよ
眠りをさまたぐる幻よ
いかなれば我はかく惱むや
さながら地獄の床にあるごとく
荒びたる血の恐しく猛る苦しみより
のがれん術は無きや
おゝ眠りよ、天國の眠りよ
現世の惱みを優しきものに替へる眠りよ

罪なきものゝ安らかなる
良心の床よ、星の寢床よ
我が願望は只優しき眠りに憧る

秋

秋だ
子供の時から大好きな秋だ
よく友達と遠足した秋だ
塾の先生と土曜の午後から
世田ヶ谷へ遠足した秋だ

先生と二人で話し乍ら
薄のしける田舍道を鞋ばきで
楽しく歩いて行つた秋だ
狹霧のこめた林の上に
夕月を見出して喜んだ秋だ
先生の崇拜する松蔭神社や、井伊大老の墓に詣でた秋だ
大老の家老の某が
門番小屋に住んでゐて
墓掃除をするのと、繪をかくのを仕事として
世に埋れて仕へて居た
もう七十位の老人で、
先生の知合だつた

自分は先生と老人の話を
側にかしこまつて聞いてゐた
老人は、茶澁の出た汚いふちの缺けた湯呑に茶をくれたりした
三疊位の一間で
そこには繪の道具が一ぱいちらかつてゐた
古びた皿には乏しい繪具が殘つてゐた
老人は四方山の話をして
これからは落葉で掃除が大變な事や
冬の夜更に狸が來て戸を叩く話等をして
自分にも二三枚、墨繪をかいてくれた
「立派に成人さつしやい」等と云つてくれた
自分はその繪を母に見せると

母が大變喜んだ
日本畫をかいた母は
その老人の名も知つてゐた
その繪も今はなくなつてしまつた
老人ももう亡くなつて
大老の墓のそばにでも石碑となつてゐるだらう
先生の親戚の百姓家へ泊つて
翌朝早く栗を拾つて
それで栗飯の御馳走になつた秋だ
先生の塾を故あつてやめてからも
自分は秋になると一人で郊外を歩くのを樂しみにした
獨歩の武藏野を愛讀して

櫟林や薄の丘に
百舌の聲をきゝ乍ら日を暮らした秋である
紅綠さんや惣之助と
子規の墓に詣でたのも秋である
大瀧寺邊りの樹木の黃葉が美しかつた
秋になるとそんな事を思ひ出す
秋よ、今年も一人
自分は練馬の奥を歩くのだ

月夜には

月夜には
世界が廣がつて見える
自分のゐる村等は
小さく小さくなつてしまふ

月夜

餘り明らかに

ものが見える月夜は恐い氣がする
澄み渡つた空の
輝く星を見てゐると
氣味惡くなる
ぢつと地上を見てゐる星のやうである
餘りに淸くて勿體なくて

朝の空氣

朝の空氣の美しさ
山々が長閑な色をして
冴へ〳〵して澄んでゐる
冬とは思へない
溫和な陽氣だ
人聲がまるでしない
しんかんとして
美しくて寂しい
冬景色だ

この澄んだ空氣

この澄んだ空氣を喜ばう

戸を開けると

戸を開けると
長閑な色の山々が
冴々した温和な空氣に包まれて連つてゐる
その緣の美しさ
山は憂鬱に見へる時が多いが
朝の光線で見ると
海のやうに長閑な色をしてゐて美しい
しかし何となく冬の山は淋しい

夕暮

夕暮は今
一日働いて疲れた人々のために
夜の床を用意するために
靜かに無限の優しさを持つてやつて來る
大小とりぐ〜の雲が
金色に、紅に、青に、紫に
飾られて優しく棚曳き
その雲の幕が落ると
夜が星を從へて登場する

都會の屋根々々の上に
騒然とした瞬時も勞役の休まらない
地球の生活の諸光景の上に
薄紫の夕星は秋の夕の
煙れる大地の彼方に
優しく瞬いて
懷しい幸福の子守唄を歌つてゐる
永遠の母のやうに靜かに招くが如く
休息と慰安の夜のシンボルのやうに
星は今夜も使命を果してゐる
大地の勞苦をねぎらひ
亦大地の存在を祝福するやうに

星と大地は昔から握手してゐる
おゝ星よ、懷しい永遠の友よ
私は御身の方に禮をする
永い汝との交りを感謝し
私も歌はふ
天上と地上、人類と星との交歡の喜びを
おゝ星の使節よ
地上の貧しい一詩人の粗野の禮を甘受せよ

冬

冬、玲瓏とした空の青さ
山々は寶石のやうに
透き徹つて來る
善と美の空氣の中に

或る秋の日

朝の神が、夜の眠りの天使達を追ひはらひ

太陽が燦然と朗らかな姿で
天帝の如く平野の末に
圓い焰、眼と瞳る時
私は見る、家々から飛び出す百姓の群
額に汗して働く力強い、山岳と平野の征服者を
私を見た、野の英雄のやうな老いた農夫
凛烈な霜のやうなこわい白髭に飾られた赤銅色の首
勞苦の痕を語る無數の皺に刻れた名譽な額
この地上で最も老いた人のやうな
神々しいシンボリツクな百姓を
併し彼は未だ腰も曲らず、堂々とした超人のやうな背丈で
武士のやうに鍬を捨てない

私は彼の姿を見て、思はず泪が胸に下るのを覺へた
生涯をおろそかにしなかつたらしい此の人の姿に
私は恥づかしくなり、思はず讃嘆した
「おゝ老英雄よ、大なる父よ
地上の星霜を經て神々しくなりし友よ
ヨブの如き老丈夫よ」と
彼は今、征服者のやうに旭の昇る野を見渡してゐる
彼の眼はその息子に、嫁に、息子の許嫁に走る
彼はボンヤリと彼の壯時を樂しく息ひかへしてゐるのかも知れない
彼の旭に照らされた顏には温かな微笑と寡黙な決心が
怠けものゝ若者の心を責める
私は涙ぐんで考へた、そこの枯草と榛の落葉の上にグタリと重つて

野の秋は朗らかな
平和な落し水のゴボ〳〵となる響きに和して
鶉や鵲鴿の清らかな歌
澄みわたる野面には太い聲や鍬の石にふれる音や稻こきの音
働く人々の動く氣勢
怠けものゝ私、ブルジョアの子弟の私は
胸せぐまつて、大地に跪く
私はこの着物が脫ぎ捨てたくなる
裸一貫となつて、夢のやうな生涯から
新しい生涯に目覺めたくなる
百舌が啼く、頭が擡げると
大なる山岳が、平野を圍み

或る高い頂きは雪を帶び
白馬のやうな雲が走る姿
颯爽として秋の歡喜は天地に充ちてゐる

秋

おゝ秋よ
黄なる寛衣をゆるやかに着こなした山毛欅よ
金髪の木々よ瑪瑙色の紅楓よ
惜しげなく散る木の葉の上に
私は獨り坐つていみじき四邊の調和に見惚れ

目白の連れ啼きに聽き惚れて默想に耽る時
見知らぬ二人の愛人が仲睦じく籠の方へ
峯の乱る松の間から下りて來るのを見た
男は眉目秀麗の貴公子
女も卑しからぬ人品だが
男より稍々劣りし身分の人だらう
女はわざと華美の裝ひを
地味なコートに隱して
手には道々摘んだ花束をもつてゐた
紫のりんどうに白い山菊　それに漆の紅葉を添へて
二人は枯松葉こほれ　草紅葉する山徑を
語る事も盡きたのか

肩を並べて默々と歩み去つた
おゝ、秋にふさはしい二人の姿よ
都からこの山奥まで、秋を訪ねて遁れ來た
戀の外には何をも考へてゐないやうな二人だ
まことに他を忘れ、世を忘れ
醉ひ狂ふ戀ならで
この秋の美にも比ぶべし
私は涙ぐんで二人の幸福を祈つた
山鴉切りに啼き
日の蔭つた林には
鍛冶屋の夕暮の歌、澄んだ空氣に響いて
林の中に夕べ迫りてひろがりゆけば

自分も疲わた身を枯草の上から起し
二人の消え去つた山の傾斜を麓へ下る
遠く平野に一流の河
秋の狹霧の中にほのめいて流れてゆく
おゝ二人の貴人の行方はいづく
この河沿ひのひなめける宿にでも入りしか
それともはや驛より汽車に搭じて、都へ去りて此の土地にはあらざるか
幻のごとく二人の秋の姿、我が胸に殘れるを感じた

秋

秋！秋！秋
私は今秋の最只中にある
私の周りには秋の變化が日に日に深くなつてゆく
天候も定りが無く、晴れたり、曇つたり
時雨たり、月夜になつたり
その變化に伴れて千態萬化してゆく地上のさまは言語に絶した壯景だ
おゝ秋よ、秋は莊嚴に大壁畫を完成する
まるで至る處に創造があり努力があるやうに
峯と云ふ峯、谿と云ふ谿が

季節の莊嚴の奏べを歌ひ出した
然うして夜は、おゝ月光が痛ましいまでに
その光りで地上を靈化する
月明の山々、月明の谿々の秋の美しさ
おゝ壯美の自然よ、無限の野趣よ
私は今秋と共に生き
この千變萬化の自然の壯擧を祝ぐ詩を捧げるのに
日もつかないやうだ

秋日和

秋日和私はフラ〳〵と田舍へ出懸ける
呑氣で苦もなく
田舍の秋晴れに少年のやうに成つた
私は喜びを包んで勇しく肩で風を切つて歩いてゆく
欅の巨大な並木の都會から田舍へ貫く古い街道をまつすぐに
私はハラ〳〵と散る木の葉を輕く浴び乍ら
戀人にでも會ひにゆくやうに勇み立つ亢奮をぢつと抑へて一人樂しみ味ひ乍ら
大好きな木々が色づいて、

莊嚴の秋の冠をゆするを見乍ら
もう黃ろい畠や薄の穗波の閃めく丘や
雜木林やドン〳〵流れてゆく小川や
親しい田舍の素朴の風情に
詩人らしい親和を感じ
涙ぐむほど樂しくなつて
少年時代から親しく
懷しい武藏野の秋を訪ねて
私は悠々と今日の日を樂しみにゆく

秋の小川

二三日つゞいた雨に
たつぷりと水量を増して
にごつて、溢れて秋の小川は
野菜や赤まんまが
水にのぞんで咲いてゐるその下を
柿の落葉を浮べてどん〳〵流れてゆく
見てゐるとこつちの心も
流れと一緒に歌ひたくなり走りたくなる

落葉

朝井戸端へ顔洗ひにゆく
隣の百姓家の茂みの落葉が
そこらの濕めつた土に散乱してゐる
百舌がけたゝましく啼く
風が茂みを搖すり
ハラ〳〵と木の葉が散る
秋だ、顔を洗ひ乍ら見上げると
柿の木の梢に赤や青い實が鈴成りに
葉が色づいてゐる

朝寒

噓が出るほど朝の寒さ
裏の小川に出て見ると
昨夜の夜露に振ひ落ちた
疎らな葉を殘した榛の並木の梢に
淡い三日月が消えてゆく
小川の水は美しく澄んで
柿の木蔭が映つて
星も映つて靜かに流れてゐるのに見惚れ
眠けはさつぱり頭をはなれる

虫

虫は歌ふ
毎晩々々、寒さに向ふのに
さかんな合奏
風雨の凄じい夜も
侘びしい曇りの日にも
美しい月夜にも

月夜

近所の百姓家から
「御湯にお入りなさい」
と戸のそとで聲をかけてくれた
子供が
「父さん僕も一緒に入るよ」
と尾いてくる
戸を開けると
靜かな秋の月夜である
見渡す限り

村の家々はしんとして
月光の中に遠い山脈もうつすりと見へ
畠の方には狹霧がこめて煙つてゐる
前の桐の木がから〳〵になつて
疎らに殘つた葉が
月夜の空にぶら下つてゐる
道へ出ると
下駄の音がカラコンと響く
子供が案内するやうに
先に立つてその百姓家へ
元氣な聲で「おばさん、父さんが來たよ」と
飛んでゆく

そこの家ではカタコン〳〵と機を織る音がしてゐた

新らしい頁

毎日、毎日
自分は新らしい頁をめくる
そこに何か書きつける
何も書けない空白の日や
詩が十も二十も書けた日や
新しい頁をめくる喜び
今日こそはいゝ詩に恵まれよ

一つの星

一つ星が
早くから出て
皆んなの集るのを待つてゐる
今夜は不入りかなと思つてゐると
いや、出た、出た
素晴しい大入繁盛
皆んなの熱心に感心する
いや賑やかなこと
今が出盛り

大陽氣に空が搖れかへる

一寸したことで

一寸したことで
すぐ悅ぶ
妻や子供だ
悅ばしてやりたし

悅びを與へる

悅びを與へる
喜び

靜かな晩

靜かな晩だ
波の音も今夜は低くて
ほとんど聞えない

非常な風ぎだ
實に靜かだ
空には月が照り
晝間のやうに
澄んで明るい
こんな靜かな明るい晩はめづらしい
永遠の懷ろに抱かれてゐるやうな
落着いた澄んだ晩だ
世界の大きさを感じる晩だ
星が遠くに嚴かに
美しく輝いてゐる
肅として夜は晴れ

月明の夜は實に清く、美しく
靜かに涙ぐまれて來るいゝ晩だ

秋の消息

友よ
私は昨日田舍へ來ました
思ひつくとすぐ此處へ來たのです
私は來てよかつたと喜んでゐます
今私は秋の最只中に
限り無い健康に漲つて

この莊嚴な季節の與へるよろこびに醉つてゐます
友よ、私は君にこゝの秋を見せたいやうです
獨占してるのが氣の毒のやうです
峰と云ふ峰、谿と云ふ谿は
もう莊麗な壁畫の完成に近づいてゐます
實際今が見頃です、もう僅かでこの美は消されてしまふのです
この二三日天氣が續いてくれる事を痛切に祈ります
私はその間に山から山、谿から谿を馳け廻るのです
何と云ふ雅致に富んだ秋でせう
私はこの季節の美が慣はしになつて
もう毎年これを味はないと
一年中不愉快に感じるほどです

健康なものにとつてまつたくこの季節は
味ふに足る一年分の滋養をもつてゐるやうです
私は妻を伴つて、優しい林間の逍遙を
樂しんでゐます
一年中の私の御祭です
私はゲーテのやうに葡萄酒をたづさへてゆくのです
然うして最後の太陽を祝別するのです
友よ、秋は自然が特に詩人に惠んだ季節ではないでせうか
さう云つて見たくなります
私の妻も健康で魅力に充ちてゐます
二人が山中でどんなに樂しく語らひ
俱に喜びをこの美しい秋の中で分つてるか

君に見せたいやうです

秋

秋が來ました
二人の散歩の道々が
もう秋の葉で莊嚴に飾られて
妻の姿が特別に愛らしく
二人の御機嫌が頗るいゝ秋の散歩路となりました
毎年二人はこの秋を祝ふ慣はしです
紅葉は二人の戀の火を朗らかに彩つてくれるやうです

林を渡る角笛のやうな風の音の爽やかさ
はら〳〵と二人の上に散る木の葉の黃金の時雨
二人は陶然として歩むのです
まるで私達の通る道を
秋は澁い好みで飾つてくれたやうです

秋

妻よ
おまへの御機嫌のいゝのは
私にとつてどの位樂しく嬉しいか

おまへのほそい手をとつて
靜かな秋の道を
幻のやうに彷徨ふのは
どんなに滿ち足りた健康の喜びか
黄金のやうに燃える林や彩られた澁い道草を踏み作ら
二人の語る言葉は
祈りのやうに情熱に充ちて痛切だ
あゝ樂しい秋の山道を
おまへの手をとつて恭しく歩くこの俺は
何と云ふ幸福な男だらうね

小學校の側を通つて

小學校の側を通つて
フト脊のびをして窓から覗くと
暗い教室に可憐な子供等が
教壇に立つた先生の方に
尊敬と愛の念に滿ちた
無邪氣と喜びに輝く顔を向けて
四五十人ばかりをとなしく默つて
皆んな視線を先生に集めてゐた
黑板の前に立つた痩せて脊のヒョロ〳〵した先生は

何か樂しいお伽噺でも話してるのだらう
我れを忘れてその幼い敎へ子達に愛と敎訓を熱心にさづけて居た
自分は貴い光景に思はず泪をポロリと落した
私は感激に燃へて
「さうだ、さうだ」と獨り頷づき乍ら
野の方へ樂しく歩いて行つた

落日

秩父の嶺の上に
まつ赤な太陽が今日の旅を終へて
火を噴くやうに焔々として

煮へくり返つた
莊重な勇ましい姿をして
山岳の上でぐる〳〵廻轉し乍らたゆたつて居る
何と云ふ奔放な偉大な姿だらう
眩ぶしくて見てゐられない
急に山々の色が紫に染まる
私はこの夕ぐれの山々にも感動する
縱走し横匍する山々の跳躍！
その形態の神秘な奇しき變化の奔放さ
太陽が沈むでも
未だツアイライトが
青銅の山々のうしろに

大橙色に巾廣く照り返へしてゐる
その色の聖らかさ
奇異な、野性のまゝの喜びが
私を驅り、私は新鮮な大氣を浴びて
喜悅に叫んで奔馬のやうに飛び廻る
然うして夜は平野と山岳の上に
優しい安息のシンボルのやうな星を生み初める
一つ、二つと數は順々にふえてゆく
私はその時心から歌ひたくなる
グレイの戀しい挽歌のやうな
天の父の親はしく
地の万物のいとほしい

優しい祈りの歌が
この安息と平和に滿ちた
廣大の天地に響かしたくなる

秋の山林

秋の山の中
森は今善美を盡して居る
實に、氣儘な色彩を着けて居る
まるで雄大な森の宮殿を巡覽してゆくやうだ
太陽は奥深い森の中までさし込んで
遠い霧の中から透かして見える森林の美は

目を驚かすばかりだ
大膽な樅、奔放な松
情熱的な放肆な氣儘な華美な衣裳をつけた山毛欅
黄ろい寛衣をゆるやかに着こなしたやうな篠懸の木
奇しきまで立派な紅葉は並びなく美しく
蠱々と立つ松の蔭から
魑魅のやうに美しく悠長な姿で舞つてゐる
そこにはあらゆる誇張と豐富と過剰がある
言語に絶した變化と屈折と奔放の形態と色彩がある
私は驚異の眼を瞠るばかりだ

冬の夕暮

夕暮の澄んだ微光の中に
靜まり返つた原の中に
枯木が安らかに五六本立つてゐる
幹と枝とが實にやさしく
少しも動かずいゝ姿勢で
暮色の中に溶け入りさうに立つてゐる
その氣品！

池

ふと通りかゝつた
小さい池を見ると、靜まつた水底に
冬枯の木々が五六本倒影してゐた
葉のない纖い枝々が夢幻的に縺れて
深い靜かさの中に、眠る樣に沈んで居た
自分は引き入れられる樣に見て居た
何と云ふ靜かさ
何と言ふ氣品

靜かな日

今日も安らかに日が暮れてゆく
風が無く
凪ぎ渡つたやうな天地の靜かさ
見るものに皆んな氣品があり
その立派さ、美しさ
此世のものとも思へない

山々

山々のあの氣品
樹木のあの氣品
自然の清らかさの中では
どんな塵でも、物質でも
その清らかさに包まれて
氣品のあるものに見へるのは驚く

冬の景色

冬の景色は實に好きだ
枯木の姿の安らかさ、靜かさ
枯草の色、靜かな道
ものゝ不動な眠るやうな靜かさには
春や夏に見られない
それに決して劣らない氣品がある

世の知らない高い事を知れる人

世の知らない高い事を知れる人
かゝる人は常に神秘に住し
低き世の進むことに耳を貸さず
只己の信じ與へられる道を高く進み
此世よりは忘れられ
されど自らは心樂しく
遠き世界へと旅立つ
我れかゝる人を尊敬し
かゝる人にあやからんと願ふ

毎朝

自分は毎朝眼を開き
毎晩眼をとぢる
自分の眼は見えざるものを見
自分の心は戰き、且つをどる
自分は神秘の中に生きるもの

知らざる事

知らざる事多く
見ざる事廣し
我が心よ勵め

内にものを聽き

我れ、内にものを聽き
内にものを見

外にものを見ず
外に聽かざるやう努むべし

星

星を見て
我が心は狂ふ
不可思議の美なるかな
汝、星よ

ハムレツトよ

ハムレツトよ
エルシノアの野にて
汝が父の亡靈を見し夜も
かゝる朧月夜なりしか
萬象、靜まりて、聲なく
異樣なる夜なるかな
刻限も、かゝる凄き眞夜中なりしか
我れかゝる刻限を愛す
氣澄みわたりて

身に泌むごとし宇宙の神秘

カント

カント
ベエトウベン
レンブラント
シエクスピヤ、ゲーテ
エマーソン
ホイツトマン
ショウペンハウエル

ニーチェ

かゝる人は皆天人なり
かゝる人は此世に來て
天使のごとく働き
此世に寶を殘し
遠く再び凱歌を擧げて天に歸りしもの
我れかゝる凱歌を擧げて
此世を引きあげし人を讃美す
かゝる人は地上に於ても亦不死なればなり
天上に於ては神のごとし

星

星は登り又沈む
煌々として澄みわたる宇宙を
神
いづくにか
居ますが如し

小さい汽船

針のやうに小さい汽船が
月明の大洋を進んでゆく
大宇宙の力強い神秘の中を
煌々たる星の嵐の中を
靜かに、決斷ある態度で
何日も何日も陸を見ないで

冬の夜の嵐

冬の夜の嵐を聽いてゐると
ふと思ひ出した
エルケーニヒ
どこかに凍へた子供を抱いた父が
馬に騎つて韋駄天に走りゆくさま眼に浮ぶ
風は彼をとりかこんで怒號し
呻き、叱咤するやう
哀れな父子の叫びが
諸天使の働き立つ聲の中に

一際鋭くきこえるやう

冬の星

底しれない深さの中に
爛々として燃える星は
天馬の眼のやうに
鋭く深く決然として輝いてゐる
天地を瞠る眼のやうに凄く美しい

朝寒の山

朝寒の深紫の山々よ
深い縦の襞に
雪が幾筋も白い瀧のやう
風は天から吹き落ちて
底しれない太氣の中に凱歌をあげる

同一回歸

萬物が靈である、大地は靈である
形あるものも靈である、形なきものも靈である
奇蹟は我等を繞つてゐる
凡てのものは同一の根元に歸る
靈へ回歸する
秋の山で汝の見た薄も尾花も
汝が樂しんだ秋も夏も消えて
どこへ歸つたか
あの美しい花はどこに消え

あの美しい綠の葉はどこに朽ちたか
凡てが同一の根元へ返る
萬物皆同一の靈へ回歸する
異なる外觀もてる他人も、又汝と同一なものである
汝もいつか靈魂は天へ
汝の肉は地に回歸する
同一なるもの、我れをめぐり
異なる形を成せども
凡ては一つの精神より生され
一つの精神に統御されるであらう

神

神！
神は一にして
全體である
自然は豐富である
萬物は形ち異りて
肉眼には差別あれども
歸するところは同一の靈である

冬

冬は今誇らしく嚴かに
夏の威力に劣らない
偉大な威力を俺達の上に加へてゐる
地球は悲運の時の姿で
月と星と三人で
寂しい偉大な寒い夜を廻轉してゐる

少年は母と海を愛す

海

横濱

ホテルの屋根から
暖かさうなストーブの煙がのぼる
その中には金や贅澤な甘味さうな肉があるのだらう
金滿家のサンフランシスコの紳士が

美しい女優を連れて泊つてゐるのだらう
俺は腹の減つた貧しいバガボンドの日本の詩人
海を見乍らベンチに凭れて
金持さうな異人が
馨りの強い葉卷をくゆらして樂しさうに通るのを横目で眺めてゐる
胸にしみるやうな華美な粹な姿の婦人の
細い靴の踵を見送る
トントンと愉快にホテルの石段の中へ消えてゆく
ホテルの内部は富と贅澤なベッドと甘美しい肉に滿ちてるのだらう

海よ

海よ
御前を思ふと
少年の日の樂しい幻が眼に浮ぶ
冒險の氣性に富んで
海外に憧れた時代の可愛ゆい俺を思ひ出す
少年の日に俺の眺めた人生も
海のごとく洋々として
希望と情熱と美に充ちてゐた
おゝ海よ

俺は舟を愛した
新しい汽車が樂しかつたやうに
港の汽船を見るのは樂しかつた
異樣な樂しい憧れと幻を
御前の姿を見ると小さい胸に湧かし
南の富んだ孤島や椰子の樹や鸚鵡や
寶石や星や虎に憧れたものだ
あゝ滅び去りし夏の日の夢よ

自分は

自分は完全の人間ではない
自分には長所も短所もある
自分は自分の長所ばかり誇張して考へまい
自分は強い意志や鋭い智力のみでなく
自分の弱い情も、又他の缺點、短所も忘れたくない
自分は人間の美しい長所を讃美する
自分に無い他人の美點や長所を尊敬し
それを自分も得たいと思ふ
けれども自分は自分の弱點、短所があるから

自分の長所が崇高のものになるのだと考へる
自分は弱點のみを誇張せず
自分の罪は素直に悔ひ改め
自分の長所を生かす事に努めよう
自分は自分の長所を誇張しまい
同時に弱點を誇張する事もやめよう

雲

雲
私は何か話しかけたいが

彼は沈默してゐる
懷しい不思議な雲

溫い田舍

溫い田舍を
のび〳〵して歩く
沈默した天の靑さ
沈默した林の靜かさ
ムダな饒舌りに飽きて
獨り默つてゐる事の好きな自分には

實に樂しい散歩だ

俺の詩

人間にきかしてもわからないから
自然にきかせて遣らう
俺の詩

田舍で

夜の眠りを妨げるものもない田舍
靜寂の中で何と深く眠ることか
きよらかな、樂しい眠りに沈むことか

霙

夜、戸外に
枯木にたばしる霙の音の凄さ

書齋でぢつときいて居ると
冬の仕業が嚴として感じられる

ねじけ者

私は救はれない罪人だ
神聖な法則を破つたねじくれ者だ
敬ふべきものを敬はず
愛すべきものを愛さなかつた
恥に塗れてゐる人間だ
友情に反いたり愛を破つたり

神の禁じたものを乱した者だ
平和を爭鬪に
愛を憎惡に替へた惡者だ
心靈より肉體を重く愛し
他人より、利己を愛した惡者だ
天地間の嚴かな正しい法則の存在を
認めなかつた大きな惡を成したる者だ
私の内に嚴かな神の法則が
働く事を感じる時
私は嗚咽して悔ひ嘆く者だ

手と手

人と人は氣の附かないところで
結び合ひ、よろこび合つてゐる
手と手を握り合つてゐる
或者は僞りの手と手を
或者は離れ離れくその手と手を

山頂の雪

昨夜から泊つた友と
雪を見に山へ登つた
自分が元氣になつてゐる故か
登る道々に見る森の中の樹々が
冷たい雪と寒い空氣の中で鋭く鮮かに
研ぎ磨かれたやうに長い枝々が澄澈とて
縱横に組み交し
雪に斑らな熊笹の中から立つてゐた
山頂へ登りついたが

濛々とした水蒸氣で麓の景色は思つたほどでなかつた
然し山頂の雪のきよらかさには驚いた
赤松がニヨキリと逞しい赤い幹で
火が出るやうに健康な幹の色をして立つてゐた
見上げると傘のやうに蓊んもりと
雪の積んだ枝々が神秘に明るく
房のやうに垂れた葉が、纖い葉が一本一本
氷つて、透いて見へる美しさ
自分は驚いてその木の周りを歩いて讃嘆した
きよらかにさつぱりと飾の無い松が
銀の星の飛び出した冠を戴いて
得意然と立つてゐる美しさ

自分が見上げて喜べば喜ぶほど
彼は美しさを増して行くやうに見へた
松の木はその位にしてフト側を見ると
そこには又冬中は休んでゐる掛茶屋が
神秘な靜かさに不思議とキレイな館と變じ
又その側には若木のさくらやつゝじの姫君の御供の衆が
これは又園子のやうな綿雪の帽子をかぶつて
細い枝々が繭玉のやうに
どこか艶な姿をして默つてゐる
と驚いた事に
どこに潜んでゐたのか二十羽近い群れた小鳥が
啼く音はきかせず、一齋に羽音をバツと立てゝ

雪の松の葉の間から
飛び立つたので
雪が澪れて
すぐもう姿は見へず
山の上はしんとして神秘な雪の夢幻劇の舞臺になつて了つた

元日に

田舍らしい靜かな正月をした
家の前の蕭條とした原を
晴着を着た娘や村の若者が靜かに樂しさうに逍遙してゐた

子供等は靜かに曇った空へ凧を揚げて居た
凧を揚げる事でも子供等には一仕事らしく見えた
揚がると子供は喜びの聲をあげて居た
空は白く曇って雪か雨か降り相で降らず
風もなく、温かで、穏やかな元日だった
遠くには雪の山が晴れて靜かに見えてゐた

冬の道

寂しい人ッ子一人通らない
田舍道

石ころと落葉とを踏んで
杖をふり〳〵通る
何の魅力も飾りもない
しかし健實で、さっぱりしてゐて
大地の固さを感じて
大いに愉快になる
うるさくないのと單調なのが
自分の心を休めてくれる

俺の子

俺の子は
靜かに遊んでゐる
友達がなく一人で
餘り靜かなので
出て見ると家の裏の
靜かな溫い日向で一人で
土いたづらしてゐる
何か獨言を言ひ乍ら
涙ぐむ

子供

子供よ
幸福に樂しく生きよ
父は苦しみすぎたけれど
御前は樂しく生きてくれ

小景

峰の上に冴えた月が光つてゐる

峰の樹木が鐵のやうに生へ
山の姿は月光の中に緊張して嚴かだ

日の出

日の出の喜び
滿地の霜に映じて
りう〳〵と太陽が救ひ主のやうに
地の果てに現はれる時の神々しい靜寂
小鳥の讃歌が林や空にたへ難いよろこびの歌を洪水のやうに流す時
自分は心も革まり

何か嚴肅な、歡ばしい
敬虔の念に、心樂しく亢奮する
神秘な嚴肅な、喜びが
自分の身軀にも傳はるのを感じる

冬の日暮

雀が屋根の塘に
入つたり、出たり落着かない
冬の日暮の淋しさ

冬

松は赭く、熊の毛のごとく
松の葉は青くするどく
天は木の間に寂しく冴ゆ

冬

小楢の枝に残れる葉寂しく風に鳴り
白き羽を見せて頰白飛べり

頰白も珍らしくなければ
ステッキにてねらふ眞似等する

冬の月夜

眞夜中に家を出て見た
明淨極りない月夜である
今は全く寒氣と時刻が
田舍の風物を凍らして
鋭い月光の裡に地上の生物は眠り亦死んでゐる
地は霜に厚く包皮されて變貌し

濛々として降る霧は白い渦を宙に卷き
遠く月光の裡に雪の山々が
妖靈めいて彷彿と連り
尙降りしきるらしい白雪の中に
異樣な眞紅の星が燃えてゐる
何と言ふ凄まじい憑れたやうな美だらう
私は森嚴の氣に包まれて
無窮の天を仰ぎ、沈默した地を眺めて戰いた
私は雪の山々を再び見る勇氣がなかつた
全くゾッとするほど凄い
併し月は傲然と反り返つて輝き
麗はしい星は彼の周りに繞集し

崇高なブレークの月と星とである
私は死の白夜の中に立つて
光りに接したやうな喜びを感じた

子供の時

私は子供の時
よく神社の境内で遊んだ
手洗殿の、大きな石の手洗の側で
そこにある木の小さいひしやくで
水を汲んでは濡して遊んだ

然しその手洗には水がいつも乏しかつた
御祭の日にしか水は湛へられなかつた
いつも御祭の日の残つた水が
少しばかり、底に残つてゐて
そこには子子が湧いたり、落葉が沈んだり
さびた穴開き錢が落ちて居た
私は石の底を掻き廻しては
水の乏しいのを嘆いたものだ

夜の日

河原の洲の中の
水溜りに
小さい魚が力なく泳いで居た
冬の日

木枯

木枯の季節と成つた

冬ざれた道の白さ
刺すやうな寒さ
自づと足が急れる

冬の小景

プラツトホームに枯木が二三本
平原の中の冬のステーション
乘る人が自分ひとり
寂しい枯野の景色を見乍ら
汽車の來る方に耳を澄ます

霜月夜

すさまじい霜月夜
空氣の綺麗さ
月光に氷つた木々の
尖つた枝がバリ〳〵してゐる
池には氷が張つてるだらう
空も地面も靜かで
玻璃のやう、星が滴るばかりに光る

星

玻璃のやうな明淨な空
星が液體のやうに
地に近づいて見へる

星

空が、星をぶら下げてゐる
爛々と輝いて、地に近く

冬だ

冬

冬の月夜

ハムレツトが
父の亡靈を見たのは
こんな晩のこんな時刻ではなかつたか
朧ろな冬の月夜

温く暮らしたいね
平和に幸福に
寒い風等どこを吹くと云ふ顔をして
埃は浴びたくないね

冬の夜

冬の夜、風の音をきく
海を思ふ
海には遠きところだが
あの風の音は

波を思はす
風の中には整調がある
しづかに吹くな

自分の愛す詩

自分は愛す
電光の如く輝き出る詩を
撰擇の隙なく
滾々と興に乘り
輝き光りつゝ湧く泉

たしかにある光りが
液體のやうな光りが
文字にからみつく
をの〻く如うな激動に
稍々畏怖を感じる思ひ

見へざるもの

見へざるものを
自分は見る
きこえないものを

自分はきく

汽車

山の上から見てゐると
小さい黑い汽車が
畠の中を走つて來る
山の上まで遠くゴロ〳〵きこえる
乘つてる人があるのだなと思ふ
一寸嬉しくなる

天人

我らの中に
天人あり
我ら愚にして無智ときはめ
その人の爲す事を畏敬せず
その人天に旅立ちてより
遽かに狼狽して
敬はざりしを悔ひても及ばざるべし

悲しい晩

悲しい晩だ
いろ〳〵の事を想ひ出す
悔ひの天使が
私の胸を訪れ
私にもつと力強く
もつと正しく生きよとすゝめる

或時

井戸へ菜を洗ひに行つてゐた妻が
慌たゞしく歸つて來て
前垂で手を拭き乍ら
役場へ稅金を拂ふのを忘れてゐた
「今急に思ひ出した」と立ち騷ぐ
「さうだつたね」と私が云ふと
「あなた知つて居たの」と少し聲を强くする
「そんな日限まで知つてるものか」と私は笑ふと
「廿五日までだつたのだ、覺へて居ようと思つて、忘れちやつた。困つたね、罰金とられ

るんでせう」と机の抽斗から
その役場の書付けを探し出し
鏡の前へ行つて急いで髪を撫で付けて
それから私のところへ來て
「私一寸行つてくるわ、御金下さい」と云ふ
一圓七十錢持つて、彼女は
表に遊んでゐる末の兒を
「Kちやん〳〵」と呼んで一緒に出てゆく
私は障子を開けて
「をいOへ廻つてマダムボワリイを返へして貰つて來てくれ」と賴む
「フローベルのボワリイ夫人だ、俺が借した本と言へばわかる」
「フローベルのね」妻は行つて了ふ

そこへ長男が學校から退けてくる
もうそんな時間か
かばんと畫洋紙入れを肩からかけて
黑い毛糸で縫つた辨當袋をぶら下げ
長靴をはいて
赤い汗ばんだ顏をして元氣なく歸つてくる
「くたびれてしやうがない」と上り口にぐたりとして室へ上るのも面倒臭ささう
「暑いんだ、羽織をぬいで……」と私は注意する
スポートのシャツを二枚重ねて着て
その上にカスリの綿入、綿入羽織
いつでもこの兒は厚着で
肩がつまつたり、からだが重くて疲れ易いのだらうと思ふ

幾度注意されても直さない
肥つてる樣に見せたいのだ
學校で「デブ」と呼ばれるのが嬉しいのかもしれない
彼は鞄と畫洋紙入れを柱の釘にひつかけ
辨當を疊の上へ投げ出し
羽織をぬいで、座つて、ボンヤリ息をついてゐる
自分は二疊の室へ入つて机に向つてゐると
「遊んで來るよ」と出かけた
「疲れるぞ」と自分は聲をかけたが行つてしまつた
と又戻つて來て
「十錢くれない」と障子を開けた
又かと思つて、机の抽斗から臺口を出して見ると十錢と五錢と二つころがつてゐた

「何買ふんだ」ときくと
「うん何でも……」と返事が甚だ曖昧なので
「五錢でいゝだらう」と云ふと
「七錢くれない」と云ふ
「何でもいゝなら、五錢で澤山だ」
「五錢の外、大きいお金なの」と臺所へ出て手でも洗ふのか、洗面器の音がしてゐた
自分は自分のうしろへ白銅を置いた
「貰つてゆくよ」と彼は入つて來て持つて
「行つてくるよ」と出て行つた
何か唄ひ乍ら、長靴をボカ〳〵させて
自分の居る室の窓の下の道を通つて行つた
「オーイ」と急に誰かに元氣に聲かけた

向ふでも「オーイ」と返事した、道に砂利を踏む音がした
「誰だらう」さう思つて、腰を浮かして
窓の腰硝子から覗くと
向ふの畠の側の道を、Oの家の番頭が女房と公園の方から歸るのであつた
夫婦ともニコ〳〵して、彼の方を見乍ら歩いて行つた
彼の姿は自分のところからは見へなかつた
そこは家の脊ろからダラ〳〵低くなつて
向ふの道へ出るのには
一寸谿があつて、そこの丸木橋を渡つて又少し登るのだ
番頭さん夫婦は先きへ行つて了つた
そこに横肥りの彼の姿が道の上に浮び上つた
自分は腰を下ろしたが、泪ぐんで了つた

小景

平野と山岳の中の
寂しい町の停車場
暗い燈火の中に寒さに震へ乍ら
汽車の出發を待つ人達
外套、襟巻、古い頭巾
懐ろの暖さうな人、貧しさうな人
ものに關はない百姓、官吏、商人、女房さん、少女、御召のコートを着た中年増
雜多な浮世の十二月の人々
皆んな默々として時間の早く經つのを苛々と
待つてゐる
隅のベンチに小さくなつた少女
狹い二等室に威張つてゐるラツコの襟の外套の大男
百姓の兒らしい小學生（學帽にカスリの着物、足袋跣足、腰にふろしき包み）
私は寒さにふるへ乍ら、淋しく
見知らぬ人々の冬の姿を見てゐた

氷を解かせ

氷を解かせ
氷を解かせ

お前の胸の氷を
お前の胸の氷が溶けたらば
樂しい歌が生れるだらう
氷を解かせ、氷を解かせ

胸の蟠り

胸の蟠り
それがとれたら
樂しかつた
胸の蟠り

お前の爲す仕業は
本當に恐ろしい
疾妬や、憎惡よ
それがとれたら
此世は樂しくなつた

小景

妻が七厘に、夕の飯の釜をかけて、自分に焦げないやうに、焚けたら下ろしてくれと頼んで町へ使ひに行つた。僕は焦がしてはならないと思つて、障子を細目にあけてそこから戸外へ出してある七厘の方を注意しい〳〵、讀書して居た。もう焚けはしないかなと思つ

て見ると、炭がすつかり燃へて火の色が實に美しいのにをどろいた。七厘も今沸騰して飯が出來さうになりかゝつてるところで、白い湯氣が、木の蓋を中から少しゴト〳〵動かす白い汁が蓋の間から溢れてこぼれる。その素燒の赤い釜と火のやうになつてるやはり素燒の赤い七厘とが、まるで大きな寶玉のやうに燦然としてゐるので、自分はつく〴〵と見惚れた。それは原の中で周圍の空氣が塵一つなく、澄んで冴へ〳〵してゐる故だ。自分はこんな安つぽい一個の物質が、單に物質としたら實に價値の無いものであるが、それが大きな靈的な大氣の中では、とてつも無い美に見へる事を發見して讃嘆した。然うして長與の「雨漏り」の詩を思ひ起した。あの詩は實に面白い、今思つても微笑みが湧く詩だ。いろ〳〵の陶器が雨うけのために室に並べられたところへ、長與が餘り家族が賑やかに面白さうに騒いでるので、出て來て見ると、その有樣なので呆氣にとられて、驚く。然うして、朝鮮の高價な壺も臺所のおさんどんのやうな摺鉢もそこでは堂々として美を發揮してゐたと云ふ骨子の詩だが、あの詩は本當に眼に見へるやうにあの望月の晩のにわか雨の雨漏りで一家總出で狼狽する親はしい光景が無駄がなく、一聯一句、秘密な心の働きで、表現されて居た。氣品のある美しい詩だ。專門の詩人をして顏色なからしめる詩だ。今年も多く詩を見たがあの詩位の詩はどこでも見られなかつた。と自分は思つた。

小景

河原の洲の中で枯草に休んで、河向ふの畠で、靜かに働いてゐる百姓の遠い姿を見る。麥蒔きでもして居るのか、畠の中を往つたり來たりして居る。景色の中で働いてゐるのは彼獨りだ。外の畠には農夫の影が見へない。收穫の終へた十一月の畠は寂しく靜かだ。或る畠は土が黑々と太い畝の線が美しい。或る畠には藁塚が積れ、或る畠には野菜が、霜枯の中に一點の綠を點じて居る。こゝに見へる材料は悉くシンプルで善良の感じがする。自

分はミレイを思ひゴツホを思つた。

草枯

家の前の原がすつかり黄色く枯れた。原の向ふの畠や木立が、雨風に曝らされて、汚らしく、田舎めいて、霜枯れの佗びしい風景だ。風の吹かない日でもそこらが白け切つて、うつろな感が漂つて居る。實に靜かで土は眠つてゐるやうだ。活動がまるで靜止して居る日光は潤澤だ。ボンヤリ日南ぼつこして遠山を見乍ら、手隙きの妻と、冗談を云つたり、人の噂をしてゐる。

笹鳴き

家の裏の小さい谿に添つて杉と檜の青々とした叢林がある。谿に成つた崖には、葛や、茨や、薄や雜草の枯葬で、そこへはよく小鳥が來る。腹赤や頰白や蒼雀等が來る。此間まで茨のルビーのやうな紅い實が結つて居たが、もうすつかり食はれて了つた。夕方、きつとその谿の藪の中でチャツチャツと笹鳴きが、慌しなく、夕暮の歌をうたふその聲が冷たい身に泌む空氣に響いて、枝移りし乍ら、身を轉じつゝ「チャツ、チャツ」と啼いてゐるのが間近かにきこえる。あの聲はへんに好きだ。子供の頃を思ひ出す。……

冬に

寒さが遣つて來た
けれど私は狼狽しない
私は樂しく御まへを迎へる
私の準備は整つた

冬に

荒寥としたこの田舍

冬は私の心ををびやかす
しかし私は戰はう
老勇士のやうにね

散歩

日が秩父の山の方へ沈んだ
靜かに穩やかに
たゆたふことなく
然うしてこの平原の隅の
山の麓の小さい町の

ゴタ〳〵塊つた家並に燈火がともり
河の方から靄が湧いて
巾廣く宙に棚曳いて
その暮色と靄と微光の中に
戸數二千餘りの平原の一隅の町は渾然として
私が立つて見てゐる崖の上から
二丈有餘の杉の林が蟲々と嚴かに聳へた間から
その生活の營みの聲が
親しく、懷しく
河瀬の音や人馬の音にまじつて
しかし爽やかな靜かな靄然たる暮色の幕を通して
かすかに、親しく響いてくる

さあ歸らう
靄が一ぱい地を罩めた
私は一歩一歩暮れてゆく靜かな道を
身に泌みる空氣の中を
私の胸に反響する目の前の景色を樂しみ乍ら
快く樂しい心を抱いて野を横切つて家へ歸る
畠の畝のすばらしい線
綠が乏しくなつた周圍に
葱や蔬菜の澄んだみどりの
浮き立つやうな鮮やかな色
愛らしい菜園の眺め
質朴優美な枝ぶり面白い枯木

枯草の小徑
凡てが情け深く美しく
私の胸に反響し
私の胸を反り返へらせ
私は腰をのばして愉快に歩く

藝術品

藝術品に大切なものは
生きた氣品だ
氣品のない藝術は

賞讃しにくい
自然を見ると
氣品のゆたかなのにをどろく
どんな小さいものでも
氣品があつて
その美に優劣がないほどだ
人間の造るものでは
氣品のあるものと
氣品のまるで無いものとの
優劣は實に一目瞭然である
自分は強い精神の生きた氣品の高いものを讃美する

夜

夜、何かゆめ見て
目がさめるとへんに淋しい
目が冴へてしまつて眠れない
起き出して机の前に座つてゐると
元氣に成つた
やりたいことがゾク〳〵頭へのぼつてくる

友達

友達に會ひたくなる
心を寛げて話したくなる
たまには仕事を終へたあと等で
心を寛げて話し合ひたい
いゝ友達と

友達

友達には感謝する
いゝ友達がゐなかつたら
どんなに淋しいだらう
しかし自分は孤獨も好きだ
男らしく、堪へ忍んで
仕事に熱中してゐたい
孤獨なるものよ
汝は大なり

生ぬるい幸福

生ぬるい幸福より
むしろ強い孤獨が自分に
仕事をさせる

大なる人

大なる人は皆んな
孤獨で、生きたのだ

仕事をもつ人は
どうしても孤獨だ
孤獨の中に愛が湧く
孤獨の中で反省は得る

いゝ仕事

いゝ仕事は孤獨から生れる

寒い風

今日は寒い風が
家のまわりでザア〳〵と音立てゝ
渦を卷くやうに吹いてゐる
方向の定らないやうにぐる〳〵廻つてゐる
その音をきいてると冬だ、何かやりたい

小さい龍卷

小さい龍卷が
道の上でクル〳〵と
落葉を集めてころがしてゐる
だん〳〵渦が大きくなつて
遠ざかつてゆく
遠くの木立が搖れ出した
まるで地に落ちた惡魔が呪ひをして
逃げてゆく樣に渦がだん〳〵大きくなつて
空へ卷きあがつて消えてゆく

大望

私は今「大なる歌」に着手してゐる
「大なる歌」とは私の宇宙の認識の歌である
私は偉大な先驅者や哲學者の認識より以上の高く廣く深い認識へ達したいと思つてゐる
私の「大なる歌」は
ニーチェが「ツアラトウストラ」を歌つたやうに
ホイツトマンが「草の葉」を歌つたやうに
ダンテが「神曲」を、ゲーテが「フワウスト」を歌つたやうに
宏大無窮の宇宙の神秘の認識を
私の「大なる歌」は歌はうとするのである

私は靈感に鼓舞されて、敬虔な念に打れつゝ
この「大なる歌」に着手し初めた
私はいつそれが完成するかしらない
私の今書いてゐるものはこの一部分である
私はこの「大なる悅ばしい歌」を早く完成したい

自分の歌で

自分の歌で
全人類を兄弟のごとく
一つの聖なる旗の下に呼び集めるやうな
詩人となりたい

冬の夜の詩作

親しい樂しい冬の夜
家へ歸ると、僕は熱心に詩を書くのだ
僕はかじかんだ手にペンを持ち
頭の中の熱火で眼が霞むのもかまわず
机に向つて、情熱に充ちた胸から
亢奮した頭から
壯大な詩を、無雜作に

ペンをギシ〳〵と音させて書くのだ
僕はあら〳〵しく書き損ひを破り
新しい原稿紙にまづい字で、書くのだ
僕は叫びたくなり、手をふり廻したくなつて
ペンを持つた手を
敵に戰を挑むやうに頭の上に持ちあげて振り廻すのだ
僕は油の入つた輪轉機のやうに
ガタ〳〵亢奮して、軀を震はせ
机をゆさぶり、唸り乍ら、詩をかくんだ
僕はうるさい位、あとからあとから
出てくる文句を紙に書きつけてゆく
こんな愉快を知らない

僕はもう明日の糧の事なんか心配しやしない
僕はこんな時は、善良で、快活で
友情に滿ちてゐて
僕は若し盗坊が入つて、僕の品物を今
目の前で默つて持つていつても顧みないだらう
僕は今生の最高潮に達してゐるのだもの
何が出て來たつて驚きはしない

僕の詩

僕は僕の詩が拙劣で

磨きのかゝつたものでない事を知つてゐる
それでいゝのだ
僕は、磨きをかけようともしないのだ
僕の頭から生れたものを固く信じるのだ
二度と之れは書けないのだ

生きてゐる事

僕は時々自分の生きてゐる事が
嬉しくて、世界が樂しくて
泣き出したく成る

僕は愛したいのだ
誰でも關はず愛したいのだ
人も亦僕を愛してくれるのだと思つて疑ひたくないのだ

心の喜び

僕等の心が喜びにをどるのを
若し輕蔑する奴があつたら
僕等はあべこべに彼等を氣の毒だと思ふだらう
僕等の元氣なのは云はれのない事でないのだ

海

海よ
力の海よ
太陽を養ひ、星を生む海よ
剛健な民族を生む母なる海
ヴィナスの海
バイロンの光榮の頁を飾る海
船をその腕に卷き込む怪力の海よ
熱き孤島と、雲と、鷗の海よ
移民の海よ

紐育から携帶者の渡つてくる海
女優を連れたサンフランシスコの紳士が物見遊山の航海
月の夜に出沒する海賊と密獵船の海
南に北に東に西に間斷なく流るゝ潮流よ、幾多の岬よ
冒險と勞働と奇蹟に富んだ海よ
親しい海の動物よ、正覺坊よ、あざらしよ
巡遊する壯大な鯨よ鯡の大群よ
少年の日の夢に汝はいかに樂しき幻の世界だつたらう

空氣

空氣！　空氣は神聖だ
誰も見ない、此の不死の大氣
吾々を取り卷く純粹の空氣
夕暮の靄鍵とした空氣、朝の爽昧の空氣
山岳を優しく横はらせる神秘な空氣
粗野な溶爐を包む天的の空氣
眼に見へぬ靈氣、ブレークの空氣
澄んで靜かで限り無くきよらかで
微笑を漂はす未知の空氣

星をブリヤントのやうに煌らかし
新月を聖らかにとり卷く
天國のやうな靄然たる空氣
私達の肺臓に滿ち消す
海洋を壓する空氣
小鳥に歌を、花に香りを與へる空氣
不思議な空氣、私の感覺を生々と澄澈とさせ
神秘に眼を輝やかさせる廣大の空氣

落葉

木から散りゆく木の葉を見て
私は安らかに思つた
私の肉體も地へ
靈は天へ歸るのだらう

偉大な仲間

大宇宙に生れ出た、偉大な仲間の

太陽、月、地球、星
それらの運命は如奈うなるのだらう

星よ

星よ
地球の友達よ
君達の方にも人類はゐますか
君達の方の生活はどうですか

月

太陽が見へなくなると
月は悲しい零落した姿で
お隣りの地球を訪ねてくる
地球は哲學者のやうな顔をして
偉大な死の友を眺める

寒月

カン〳〵と凍つて固まつた田舍道
寒月に照らされて歩く
寒い、たまらなく、寒い
けれども空は肅として晴れ
月は嚴かに皎々と照りわたり
星の運行が實に美しい
大きなきよらかな夜に鼓舞されて
私は霜を浴びて靜かな道を逍遙する

田舍にゐると

田舍にゐると
矢張り新聞や書籍に憧れる
馬鹿々しい世間の事知らずにゐたいと思ふが
新聞を見ないと氣が濟まない
社會へ餓へるのかしら

宇宙

俺は宇宙の片隅の
地球に生れた男
地球の中の片隅の
大洋の中の細長い島
日本に生れた男
俺はこゝで地球の人類の中の
一民族の日本の人間界のことを考へる
それに飽きると俺は他の民族のことを考へたり
地球の仲間の星を見たり、月を見たりして

宇宙の廣い息を吸つて
宇宙萬歲を唱へる男
大きくなつたり小さくなつたりする愉快

頭

私のこの小つぽけな少しの黑い髮の毛に蔽はれた頭惱の中は
又何て大きな廣大な迷宮なのだらう
この內には大宇宙がある
神があり惡魔があり
太陽、月、星、人類

全世界の美しい國々や大洋や島や
天國の夢や地獄の憑れた光景や
女や男や子供や花や、樹木や
山や、河や
宗教、哲學、化學、經濟、天文、美術や
智能と、心靈と、詩學と
無限な宇宙がこの頭骸骨の中に
ちやんとその部門々々に分たれて
混沌として居たり又整理されてゐたり
いや大變な生きた頭なのだ
俺はいつになつたらこの頭を整理出來るか
いつに成つたらこの頭に飽きてしまふか

俺はこの頭を立派な人類の偉大な頭腦にする事も出來るのだ
この奇蹟の詰つた頭め！

都會から離れ

都會から離れ、客間の談話や
新聞やカフエや、電車や
あらゆる書籍から去つて
不毛な田舍の寂しい
きよらかさと孤獨の中で
私は美しい樂しいものを見出してゐる

無人な、荒れた、幾日も雨の降らない
山の乾燥したやゝ氣味の無い
土の膚の色や、よごれた松や
淋しい元氣の無い木立や
枯草や、深い荒れた峽谷や
霜と、雪と、風と、薄日の中で
さう私は遠く流行から去つて
贅澤と文明から遠く去つて
この荒れた冬枯の田舍の埃の中で
私は飾り氣なく、さつぱりと
自分を取り戻し、迷ひを捨てゝ
健全に自信と勇氣が

苦しみの中から湧いてくるのを感じる

田舍で

私は幾日も人に會はない
私は妻と子供としか愛を分けない
最も單純で最も飾り氣のない、最も親しく卒直な
妻と子供と、しか私は會はない
寂寥、夜も晝も
私の周りには聲がきこえない
私を惱ますもゝの聲はきこえない

私をいら〳〵神經質にさせる聲がきこえない
都會の足音
あの馬鹿氣た騷々しさを
もう何ケ月もきかないのは
私の幸福だ
では何で私はこゝで滿たされてゐるのか
私はこゝで星の友だ
毎夜、私は氷れる地の上に天の壯嚴な、美しい星の友だ
毎日、靜かな薄日の林の底で
枯草の野原の友だ
石の多い、落葉に荒れた山道の友だ
私の血はこゝで凍へはしない

私の心はこゝで熱を奪はれはしない
おゝ私の心はこゝで無限の領分へ
樂しく、鼓動し
いぢけも、陰氣にもなつてはゐない
私はこゝで大なる者の友だ
聖者の友だ、太陽の友だ
もう私は賤民の友ではない
私はツラアトウストラの友だ
私は大なる者の力の友だ
無限の内に鼓動する力の友だ
目に見へ無い力の友だ
それは諸君の方へも流れてゆく

目に見えない力の親友だ

町で見た小景

長く患つてるやうに
恐ろしく顏色の青白い
痩せた脊の高い青年が
悲しげな微笑を浮べて車に乘つて通つた
、喉には白い布を卷いて
ノロ〳〵歩く俥の側を
せつかちについて行く老けた女はその母だらう

病院の歸りかしら
今日は先生から少しは慰めのある言葉をきいて
や〜安堵して家へ歸るところなのだらう
老ひた車夫と母は何か話してゆく
きつと息子の病氣の事を嘆いて話してゐるのだらう
こんな光景は珍らしくもないから恐い氣がする

母の寫眞

古るぼけた母の寫眞を
時々出して見る

しげ〳〵と眺める
淋しい夜
久しく會はず
御達者なれ

自由

本をよめる
自由な時間
ありがたい
散歩出來る

自由、感謝する
今の世で誰もが得られてゐない
自由だ
それだから貴いのか
皆んなが少しづゝ
この自由な時間を
享樂出來るやうになるといゝな
朝から晩まで働きづめはひどい
自由な時間をどんなに欲しい人が多からう
肉體も魂も自由に
休息する時間
それは働くことより

或る意味で尊い時間だ

自由

うまい自由を考へ出して
くれた人に感謝すべし
哲學者とはこんな仕事
する人だと思つた

人類を讃美す

英雄
私は彼を讃美する
人類の主腦、民衆の良心
偉大な頭腦
自信が強く
正義に燃へた
歡喜の天才
說敎者、演舌家
かゝる人の背後には神があり

その人は彼の偉大な憑れた頭腦から
心靈の命ずる聲を鳴り響かす
民衆は彼を尊敬し
彼の說く眞理に傾聽し
彼の福音に服從し
彼の手に導かれる
自分はかゝる主腦者を讃美する
かゝる、人類の戰手を讃美する
併し自分は亦かゝる神秘な人の
現はれた時もあはてないで彼の藝術の熟練發達に
刻苦する天才を讃美する
自分は人類のあらゆる選手を讃美する

一技一藝に卓越した人を
思想家を、聖者を、科學者を
人類の幸福を增進する
貴い腦の人、手の人、良心の人
を自分は讃美する
音樂家も畫家も、詩人も戲曲家も小說家も
又偉大な政治家も
民衆の味方の闘士も
聖者も、哲學者も
日本よ
その道々の勝れた人を生み出し
その人々をして彼の光ある道を行かしめよ

此世は

此世は勞役するところでなく
自由を得て樂しむところでないかな
忘け者の云ひ草かしら

幸福

此世を幸福にするように
考へることは哲人の務めだ

詩人はその樂しさを歌ふのだ

冬

冬、おう怒號する冬よ
夜の凩よ、雪よ、霙よ、雹よ、霜よ
私達を威やかす憎い冬よ
けれども書間、風がやみ
空氣が和んで、太陽が温く
畠を照らす時、雪を頂いた遠山も
暢氣な顔をした青空に顔を出す

こつちも寒さを忘れてゐられる幸福
いくら冬がひどくいぢめても
閑靜な顔してゐる自然の樂しさ

不死

私とは死ぬ者である
けれど我々は死なないものを
感じられるものである
インモータリテイの、美を感じられるものである
それで有難い

偉大であれ

偉大であれ
素晴らしく偉大であれ！
我々の空氣を清くし、高くし、擴げ
神秘で未知な
新しい現實の中に生かせ
習慣に依つて弱くなつた智性や感覺を
更に潑溂として躍らせる
靈氣豐かな世界をつくれ
死者は墓の中にばかり無い

此世に澤山ある
彼らを甦らせるのは
詩の力である
詩こそ働く力を
人の精神に與へるものだ

未知の量

未知の量が
大切である
無限、神秘が

人間を取巻く
未知の靈的作用が
美を生む

感覺

吾々は物質界の約束に縛られてゐる
けれどその常々の既知の唯物觀を
一歩躍み超へたところから
私の感覺は活々と働く
生命の神秘、私はそこに寶　見る

冬の蝙蝠

小さい蝙蝠が
冬の新月の夕べの空に
どこからか飛び出して
ういゝしく飛び廻つてゐた
その姿が可憐だつた
冬の蝙蝠、へんに神秘な感じがした
蝙蝠は新月が好きなのかしら
見てゐると靜かな楽しい氣がした

心境

凡人が一生かゝつても
經驗されないやうな
強く凄い經驗を
天才は常住の世界でしてゐる
ドストエフスキーやブレークのやうな
異常の心境に
凡人は生きるのに耐へられない
日本の心境小說等の呑氣さ
常に心が戰いてゐるやうな

ストリンドベルグの凄さ
ホイツトマンの靈感
本當に神から托されたやうな
人の胸を擊つ異常な詩
去勢されたやうな藝術は多いが
恐ろしい藝術の生れない日本
微温的な常識と無良心の藝術
皆んな心境の夢を破らうぢやないか

ホイットマン

ホイットマンは書いた
彼の流儀で、神の言葉を
ドストエフスキーも、トルストイも
彼等を讃へるのは
彼等の神を示してくれたからだ

トルストイ

トルストイは
もう自分には神のやうな
人に思へる
神に自分を捧げて
神になつた人のやうに思へる

人類は

時に人類は
大きな人を生む
何千年に一人か二人と云ふ人を
世界を背負つて立つやうな人を
どこの國の人からも遠く敬はれ
父の如く慕はれる人を
日本よ、汝もそんな人を生むだらう

冬

冬は清い
冬は嚴かな時
春夏秋の精氣をぬいて
天地の清まる時
凛として犯し難い美くしさ

冷靜に

冷靜に考へよ
汝燃え易い感情を
意志で制御して統一せよ
然うして冷靜に考へつゝ
忠實に仕事せよ
汝の熱した頭を冷靜に統一し整理せよ
汝はそこから必つと得る所が多いだらう

ドストエフスキーの顏

憑れたやうな、苦しんだ
無限に苦しみから解放されないやうな
あの悲し氣な、嚴肅な顏
私はベエトウェンとドストエフスキーとトルストイの顏が
一番好きだ
苦惱を通して喜びに輝く顏だ
どこにも俗ぽいところのないあの深刻な顏
トルストイの善良な、しかし怒つたやうな
長い厚い眉毛の下から

烱々と輝く神の眼のやうな顔の恐ろしさ

老人から若者へ

昨日はあんなに元氣だつた若者が
今日はすつかり元氣が無い
何か理由があるに違ひない
愛人に反かれたのか
親の遺産を受けそくなつたのか
氣にかゝる面の憂ひ
可哀相な若者よ

もう苦勞がおまへの若さを曇らし初めたのか
元氣なれ、若者よ
氣を減入らせて惡い量見にとりつかれるな
俺だつて若い盛りには
もう此の世に身の置き場がないと思ひ詰めたものだが
今ではこの通り元氣で丈夫で
子供の四人もある快活なおやぢだ
辛抱せよ、若者よ
廣い世界に女は他にいくらだつてある
こんなおやぢの忠告も
今は腹が立つ程不誠實にきこえるだらうが
それも一時だ

辛抱だ、辛抱だ
樂しみもあり苦しみもあり
それで人生が強い人にとつては
一番生き甲斐のあるところとなるのだ

小景

凄い月が昇つてゐる
嵐のあとの地上を照らして
出水に浸つた畠や村の上に
缺けたところが恐ろしく黑く

月を鏡にして惡魔が姿を映してゐるやう
だん〳〵月の半面が暗く蝕ばんでゆく

新月に

月よ
汝、天上の放浪者！
今汝が遠い旅より歸り來つて
遙かに勇しく
我等の視界に一すじの光りとなつて入り來るのを迎へる
おゝ新月よ

汝はいかに遠く夜もすがら歩み來りし
幾月も幾月も人寰を離れたところに
神は汝ををくりたまへる
いかに物凄い海を渡り
悲しき海の咆吼する獸を慰め
いかに淋しき砂漠をさまよひて
獅子の兒の生み落つるのを見守り
いかに久しく苦行して來たりし
汝の身の細りて窶れし姿は
昔の地上の聖者にも似て
痛ましく、汝の旅路の辛苦を語りて
汝の氣高く優しい光は勿體なく拜まれる

おゝ月よ
暫しこの地にとまりて圓らかに肥へて給はれ

長閑な冬

長閑な冬だ
一日日に温り乍ら
畠の方で畫をかいてゐる樂しさ
心が輕くなつて
思ふことも夢のやうだ

正月が近づく

正月が近づく
クリスマスの買物に
奥様やお嬢さんで銀座はさぞ賑やかだらう
もう正月の松も立つて町を美しく裝飾してゐるだらう
不景氣を知らない人達には
樂しい年の暮である
自分は郊外の小さい家で
コーヒーを飲み乍ら友達と
火鉢をかこんで人の噂や仕事の話をして

貧乏に窶れて、それでも樂しく暮らしてゐる

蜜柑と林檎

蜜柑の美しさ
冬の果物の有難さ
暖い黄色い色が
海のほとりの産地を思はせる
林檎は北の産地を、蜜柑は南の産地を
樂しい冬の果物よ、自然は矢張傑いな

畠の方へゆくと

畠の方へゆくと
スキートな空に
圓い雲がいくつも浮遊してゐる
可愛ゆい感じがする雲だ
陽が當つて畠の菜が黄ろく萠え
遠く小さい森の木々が
褐色や黄が交つて美しい

圓い雲

平野の上を浮遊してゆく
圓い雲よ
悠々とした旅の雲よ
どこへゆくのか
畠を越え河を越え
山を越えてゆく雲よ
あゝ世界は平和で美しい
遠い國へ憧れが湧く

索引

一　桃　河
二　桃と鶯　太陽神よ
三　梅　春は來るよ
四　土筆　桃よ
四　青空　梅よ
五　春の曙　春の曙
五　雲雀籠　梅
六　河　朝
六　桃　鶯
七　冬の夜道　鶯
七　春の黎明を歌ふ　春の曙
一一　早春の散歩　河
一四　雨

一五　曙
一六　梅
一八　梅
一九　春
二〇　春
二〇　春
二一　土筆
二一　花
二二　櫻
二二　花
二三　櫻
二三　薔薇
二四　母の聲
二四　桃
二五　菫

二六
二六
二七
二八
二八
二九
二九
三〇
三〇
三一
三二
三三
三三
三四

秋　三六
春　三七
友よ　三八
花　四〇
春が來た　四〇
*尙の花か　四二
野の少女　四三
春の夜　四四
*春の夜　四五
愛する人達　五〇
私の詩は　五一
一日　五二
人々は　六二
日の光　六八
夕暮　七六

夜
自然に就て
優れたもの
嬰兒
春の日
男と女
大なる悅び
生の神秘
喜び
自由
涙ぐむこと
旅で
山の中で
天地
自分の生涯

八一　妻よ　一一三
八二　道は險し　一一五
八三　詩人よ　一一六
八五　心の暗い時　一一六
八七　自分よ　一一七
八九　ミレイ　一一八
九〇　我は貧し　一二〇
一　不幸な人　一二〇
九八　幸福　一二四
一〇〇　風　一二六
一〇五　*春の畠　一二八
一〇六　快樂よりも　一二九
一〇七　倫理　一三〇
一〇九　金　一三一
一一一　何にでも　一三二

自然よ　一三三
*野兎　一三四
春の朝　一三六
雲雀　一三七
雲雀　一三九
雲雀　一四〇
春の日永　一四〇
自然　一四一
月　一四三
生命の花　一四四
樹木　一四五
生命あるもの　一四五
貴いもの　一四六
樹木　一四七
生きるよろこび　一四七

生命を　一四八
桐の花　一四八
青葉　一四九
路を歩き午ら　一五〇
青葉の庭　一五〇
生命　一五一
*小さい並木　一五二
木々　一五三
花賣り　一五三
樂しく　一五五
*子供と犬　一五六
子供　一五七
*途上で　一五九
初夏　一六〇
ゴヤ　一六二

女　一六二
若葉　一六三
夜の道　一六四
夜かへる友　一六五
友の妻　一六六
金魚　一六七
家の周り　一六八
樹々よ　一六九
*麥よ　一七〇
雨の夜　一七一
桐の木　一七二
桐の木　一七三
筍　一七四
*麥　一七五
*初夏　一七七

緑の繁み　一七九
黒い蝶　一八〇
初夏　一八二
樹木達　一八三
花が散つて　一八四
繁み　一八五
健康な樹木　一八六
草　一八七
樹や草　一八八
木々は　一八九
春の夜明　一九〇
若葉の奥で　一九一
鶯　一九二
野の逍遥　一九三
小景　一九五

夏だ　一九六
愛するもの　一九七
震災の思ひ出　一九九
平和　二〇〇
喜び　二〇一
星満つ空　二〇二
小景　二〇三
秋　二〇四
夕焼　二〇五
星　二〇六
月と星　二〇七
我家　二〇八
秋が來たら　二〇九
妻の傍に　二一〇

子供は　二一一
一家揃つて　二一二
コスモス　二一三
涼しい朝　二一四
月見草　二一六
蝶の眠　二一七
暑い日　二一八
意志の弱さ　二一九
朝顔　二二〇
小景　二二一
庭の草　二二二
涼しい朝だ　二二三
蟬　二二三
頭が濁る　二二三
夕映　二二三

自然のごとく　二二四
月と河　二二四
夏の河　二二五
渓流　二二六
蟬　二二七
星　二二九
畫の月　二三〇
つくばね朝顔　二三〇
月夜　二三一
都市　二三二
夏　二三三
餓　二三四
星　二三六
朝のよろこび　二三八
二四〇

暑い　二四一
野生の花　二四三
ふくろう　二四五
小景　二四六
青いスイチョ　二四七
夫婦揃つて　二四七
夜　二四八
夜の子供　二四九
草原　二五〇
朝の清さ　二五一
海　二五一
汽船　二五二
草花　二五四
渡來の花　二五五
小景

或る時　二五六
町の夜　二五八
がちやがちやよ　二六〇
スケツチ　二六二
愛に燃えたもの　二六四
自分は自分で　二六五
罪深い自分は　二六五
神の聲は　二六六
やさしい心を　二六七
やさしい平和　二六八
善には　二六八
まごころ　二六九
責められると　二七〇
理屈も何も　二七〇
力強い　二七一

自然　二七二
梅の木　二七四
菖蒲　二七五
蟬　二七六
木々の姿　二七七
子供　二七八
夏　二七八
樂しみ　二七九
友　二八〇
安心　二八一
友　二八一
母　二八二
菊　二八三
秋の讃美と詩人の役目　二八六

海の小景　二九二
友が死んだ　二九三
働いてゐる人　二九六
初秋の庭に　二九八
秋　二九九
散歩の途上　三〇四
雨の夜　三〇六
父が生きてゐる　三〇七
夕映　三一〇
喜び　三一一
樹木よ　三一二
或る晩　三一四
しやむの娘　三一六
秋の花　三一九
夕暮　三二〇

郊外の道　三二一
消息　三二二
消息　三二四
幸福なりし日　三二五
案山子　三二二
秋の月　三二三
朝霧　三二四
百舌　三二五
御祭見物　三二六
カフェ　三四〇
乞食詩人　三四一
不便な田舎へ旅し　三四二
詩作　三五〇
朝起きる　三五三
冬の太陽　三五五

美しい娘　三五七
少女を見て　三五九
眠りよ　三六〇
秋　三六二
月夜には　三六七
月夜　三六八
朝の空氣　三六八
この澄んだ空氣　三六九
戸を開けると　三七〇
夕暮　三七一
冬　三七四
或る秋の日　三七四
秋　三七八
秋　三八二
秋日和　三八四

秋の小川　三八六
落葉　三八七
朝寒　三八八
虫　三八九
月夜　三九〇
新らしい頁　三九二
一つの星　三九三
一寸したことで　三九四
悅びを與へる　三九五
靜かな晩　三九五
秋の消息　三九七
秋　四〇〇
秋　四〇一
小學校の側を通つて　四〇三
落日　四〇四

秋の山林　四〇七
冬の夕暮　四〇九
池　四一〇
靜かな日　四一一
山々　四一二
冬の景色　四一三
世の知らない高い事を知れる人　四一四
毎朝　四一五
知らざる事　四一六
内にものを聽き　四一六
星　四一七
ハムレットよ　四一八
カント　四一九
星　四二一

小さい汽船　四二二
冬の夜の嵐　四二三
冬の星　四二四
朝寒の山　四二五
同一回歸　四二六
神　四二八
冬　四二九
海　四三〇
横濱　四三〇
海よ　四三二
自分は　四三四
雲　四三五
温い田舍　四三六
俺の詩　四三七
田舍で　四三八
霙　四三八
ねじけ者　四三九
手と手　四四一
山頂の雪　四四二
元日に　四四五
冬の道　四四六
俺の子　四四八
子供　四四九
小景　四四九
日の出　四五〇
冬の日暮　四五一
冬　四五二
冬の月夜　四五三
子供の時　四五五
冬の日　四五七
木枯　四五八
冬の小景　四五九
霜月夜　四六〇
星　四六〇
冬の月夜　四六一
冬　四六一
冬の夜　四六二
自分の愛す詩　四六三
見へざる者　四六四
汽車　四六五
天人　四六六
悲しい晩　四六七
或時　四六八

小景　四七四
氷を解かせ　四七五
胸の蟠り　四七六
小景　四七七
小景　四七九
草枯　四八〇
雀鳴き　四八一
冬に　四八二
冬に　四八二
散歩　四八三
藝術品　四八六
夜　四八八
友達　四八九
友達　四九〇
生ぬるい幸福　四九一
大なる人　四九一
いゝ仕事　四九二
寒い風　四九三
小さい龍卷　四九四
大望　四九五
自分の歌で　四九六
冬の夜の詩作　四九七
僕の詩　四九九
生きてゐる事　五〇〇
心の喜び　五〇一
海　五〇二
空氣　五〇四
落葉　五〇六
偉大な仲間　五〇七
星よ　五〇八
月　五〇九
寒月　五一〇
田舍にゐると　五一一
宇宙　五一二
頭　五一四
都會から離れ　五一六
田舍で　五一九
町で見た小景　五二〇
母の寫眞　五二一
自由　五二三
人類を讃美す　五二四
此世は　五二七
幸福　五二七
冬　五二八

不死　五二九
偉大であれ　五三〇
未知の量　五三一
感覚　五三二
冬の蝙蝠　五三三
心境　五三四
ホイットマン　五三六
トルストイ　五三七
人類は　五三八
冬　五三九
冷靜に　五四〇
ドストエフスキーの顏　五四一
老人から若者へ　五四二
小景　五四四
新月に　五四五
長閑な冬　五四七
正月が近づく　五四八
蜜柑と林檎　五四九
畠の方へゆくと　五五〇
圓い雲　五五一

大正十五年七月十五日印刷
大正十五年七月二十日發行
〔定價貳圓五拾錢〕

著者　千家元麿
東京市神田區淡路町二ノ三
發行者　下中彌三郎
東京市外野方町新井二六〇
印刷者　野村孝太郎
印刷所　野の百合社印刷部

發行所　東京市神田區綿町三ノ三　平凡社
振替東京二九六三九番
電話神田二〇四七番

昭和五年一月五日
戸塚にて。